



昭和37年1月1日発行  
発行所  
名古屋市中区裏門前町5-2  
井上重兵衛方 電話1430  
名古屋、狂言共闘会  
印刷所  
株式会社 地上社 電話1195

狂言人語

○年頭の辞

歌村彦四郎

まずは三十七年を迎えましてお芽出度う御座います。

生れながらの寿命か知らぬが、よくもこの憎まれものが、七十年もはどがつて来られたものであります。闘病生活も早十年になります。たゞ舞台上に立てないのが骨身にしみて残念でなりません。

顧りみますれば三十六年も中々多彩でありました。中でも朝日新聞社と共同社共催の朝日狂言会、名古屋和泉会の第一回狂言の会など年二回に涉つて催しましたところ、皆様の理解ある御後援で盛会でありました。なかに一般の能の会と違つて狂言の趣味者の増加が目立つて参りました。私も骨折つた甲斐があつたと内心喜んでおります。但しその裏には強引に会員を押しつけたり、しぶく御承諾を願つたり、催しが済んでから会員券を返されたり、滲ざんに叩たかれても一人でも多くの会員を獲得せねばなりません。御迷惑をおかけしたことを心からお詫びいた

します。

○東京新橋、新泉会に三番叟

(「新橋」第五四号より抜萃収録)

花柳界は勿論のこと、歌舞伎の世界に狂言をうつしたと云うことで、狂言の驚流はなくなつてしまいました。そのようなこと考えますと花柳界で狂言の由緒ある「三番叟」が観世舞台で公演されたと言ふことは歴史的に言つても特筆すべきことでありました。新泉会が創立されて七年目の快挙が行われましたことは、演者の熱意と言ふことも勿論なことですが、三宅藤九郎先生の決断によるものであることも忘れてはならないことです。

この事は独り新橋としての喜びばかりではなく、花柳界全体としての喜びであると考えざるべきであります。しかし、尖端を行くと言ふ事は真に難しい事であり、尖端を切るばかりではなく、内容がこれに伴わなくては意味がありません。

どうぞ新泉会の皆様は愈々奮奮して、続いて第二、第三の三番叟の演者が現われることを切に望みます。

所感 和泉保之

昨年は名古屋和泉会が同好者の支持に依つて発会し、春秋に朝日狂言会、和泉会の二つの公演を持ち、狂言の価値を充分に発揮する機会に恵まれてきた事を大きな慶びとする処です。

東京に於ても、昨年初めて文部省主催の芸術祭の公演が「狂言づくしの会」として二日、三部に分けて行われ関西方面からも多数参加され好評の様で重ねて明年も期待し得る成果であつた事などを顧りみて、狂言のファンも年々多少共殖えて来ている事を強く感じます。

見せる芸術として古典の中にあつて、比較的親しみ易い此狂言を通して、正しい能楽への紹介も充分なし得る事を確信します。特に若い年代の層にアツピールする要素を持つてゐる事は何よりの特典でしょう。

古典というものを正しく紹介するうえに於ては、従来、先人の歩んできた点を重視する事も大切で、我々に課せられた責任でもありましよう。リバイバルという流行語も一般に使われる様になり、現に巷にその傾向がみられるとするならば、能楽界もよき意味に於てリバイバルブームに浸る事もよいと思われましよう。

新しい試みも結構、しかし内側から能楽の形体を誤解している傾向があるとするならば、将来は全く不安なものです。

狂言かみとめられた。一之はあつた。狂言の価値かみとめられた。という事であつて、ある一方にはみとめられてきた。という事が、狂言の独立性をもつてきたものである。一といふ様に考える人の出てきた事は、余りにも能楽の形体を忘れてしまつてゐると云われても過言ではないと思ひます。

能と狂言のつながり—能楽というものの、形体—我々もつと此点の普及に勤める必要に迫られてきてゐると思ひ新年に当り大いに自かくせねばならぬ事と思ひます。(和泉宗家)

一月催能

於熱田神宮能楽殿

一、七 学生、能と狂言の会 前九時

連吟、仕舞、舞囃子、等

能、橋弁慶 宇佐美竹郎 鈴木 章

能、敦 盛 池田 弘子

狂、文 荷 金田 正孝 横井 勝彦

狂、棒しばり 中野 鈞

能、殺生石 丹羽 久辰 加藤 光彦

能、鑑賞の部 村瀬 澄子

狂、鬼 瓦 佐藤卯三郎 井上松次郎

能、狸 々 柴田 収武

一、一四金剛流片岡道子職披露能

能、田 村 豊島弥左エ門 西村欽也

能、雪 金剛 巖 西村 弘敬

狂、素袍落 井上松次郎 河村 丘造

佐藤 秀雄

前十一時

能、望 月 片岡 道子 高安 滋郎

間 佐藤卯三郎

一、一五 清瀧会新年会

能、巻 絹 杉浦 重次

間 井上 祐一

能、百 萬 川村 鉄雄

間 佐藤 秀雄

能、石 橋 水藤 又吉

狂、鬼 瓦 佐藤卯三郎 河村 丘造

一、二二 宝生会新年会

能、籠 畑 富次

間 井上松次郎

能、求 塚 宝生 九郎

間 佐藤 秀雄

狂、佐渡 狐 井上松次郎 河村 丘造

一、二八 やるまい会 午後四時

狂、清 水 井上礼之助

狂、節 分 野村 万作

狂、成上 河村 丘造

狂、空 腕 茂山千之丞

狂、法師 母 野村又三郎

能、杜 若 観世 元昭 高安 滋郎

二月の予告

二、四 宝生流囃託会

二、一一 掬水青陽会

能、籠 塚本 秀雄

能、杜 若 柴田初太郎

能、天 鼓 佐藤 太俊

二、一八 名古屋観世会初会

能、弱法師 木原 康次

能、草紙洗小町 観世 元正

能、唐 船 山本 博之

二、二五 たなびき会囃子会

狂言の解説 歌村彦四郎

文 荷(ふみにない)

恋文を持つて行くよう云いつかつた太郎冠者と次郎冠者、文を竹に結びつけて二人で担つてゆくが、恋の重荷に肩がつかれるので不審に思つて封を切つて見れば、なんと「こいしやく／＼」と小石が沢山に書き込まれておりました。

棒 縛(ぼうしばり)

主人が留守になると酒を飲む太郎冠者と次郎冠者に不安を感じた主は、機智を以て二人とも縛つて外出します。縛られた二人は縛られたまゝ不自由など克服して酒を飲みはじめました。すつかり上気嫌になつて、フト見る盃の中に主人の影がうつります。ハテ……素袍落(すおうおとし)

伊勢参宮を思い立つた主人が、太郎冠者に伯父を誘いにやります。然し急な話と断つた伯父は供にゆく太郎冠者の首途出を祝つて酒を振まいます。スツカリ酔いしれた太郎冠者は名代をせよと餞別に素袍を貰い、ごきげんで帰る途中、むかえに来た主人と出合い伯父は参宮に行くが行かれぬかと尋ねられ「いかにも参りますまい、出来たか」とふざけて大切な素袍を落します。主に拾われて探しまわるおかしさ、井上松次郎氏の太郎冠者の酔体は本格的の演出でみものでしょう。

鬼 瓦(おにがわら) 都 して訴訟の叶つた田舎の大名

帰国することになつてそのお礼参りに因幡堂へ参詣します。因幡へ帰つたら自分も持仏堂を建てよう御堂の造作を念入りに見て廻るうち、大屋根の鬼瓦に目を止めて、ハテ誰れやらに似たようながと考へたあげく、国元に残して来た女房を思い出し、そのまゝの顔にさめん／＼と落涙いたします。太郎冠者はおかしさを隠しづれ程なくお会いになることゝ慰め、二人で大笑いし

て帰ります。皮肉な喜劇と云うか、実に狂言ならではの人間性のへんりんにつれた、味わいのある寸劇であります。河村丘造氏と佐藤卯三郎氏が一週間をおいての競演となりました。御二人とも得意のスツトボケ役であります。佐渡狐(さどぎつね)

御年貢を納めに都へ上る越後と佐渡の百姓が道連れになりました。佐渡は離れ島で狐がいなると云う、いやいと云う、云い争つて掛けろくとしお互の小刀を掛けます。館に着くや佐渡の百姓は早速にわいろを使つて奏者を買収します。狐の特徴を教へて貰つておきます。対決の結果佐渡の百姓が勝ちますが、怪しんだ越後の百姓に鳴き声を問いつめられ、鳴き声は教へてもらつて無かつたのでさあ大変……。

いつの世にも尽せぬものは汚職であります。奏者河村丘造氏のワイロの取り振りを御覧下さい。

狂言周辺 野村広二 あけましておめで さいます。今

年も佳い年でありまますように。正月は楽しいものです。今年はずいぶん寒さがきびしい由ですが冬は好きな季節です。これも、冷めたき、雪の積りもほどほどである冬のこと、南極の越冬、東京、オリンピックの聖火コースにならうとする、五〇度を越す炎熱地にはとてもたえられない。何事も中位です。でもこれがよくもわるくも危い境地なのだとおもいます。

なお、狂言や能をみていると、楽園の楽しさ、地獄の切なさはいんと胸にせまつてきます。「山姥」の春夏秋冬、金輪際、「野守」の鏡でも。狂言や能はいろいろのサガタをみせてくれます。

さて何もかも急速に変わつていきます。絵にしても、机にしても鏡にしても、花など特にそうです。小さな花差しに一輪いけるのもよいが、松の立派なのいろいろあしらう花も紅と白のカーネーション。立派さといえは、昨年の本願寺能のときみた白書院の立花の見事さはいよいよありませんでした。どこにもやはりモダンなムードが音をたてて流れています。片やリバイバル・ブーム。文芸復興と訳すルネッサンスと同じ意味のことばが三六年の流行の一面を風びしてましたけれど、古典の世界は、多少の違をあれ、牛の歩みのように、ゆるやかに

おだやかでした。

昨年狂言は、和泉保之君の活躍が目立ちます。一文蔵、腰折、蝸牛、清

水座頭」。それに茂山幸四郎、圭五郎と弥五郎翁の「文荷」。長老たちでは万蔵の「武悪」に藤九郎の「鈍太郎」。大蔵弥太郎は「釣狐」を好演。保之はほかに珍らしく「梟槍」と「業平餅」を演じました。名古屋勢では又三郎の「宗論」、松次郎の「不見不聞」「千鳥」、河村丘造の「隠狸」が佳といえます。新作では中日五流能の「雪まろげ」。この曲が話題をまいたと同様、能の新曲（といつても戦前の作ですが）「奥の細道」に「君が代」（ともに本田秀男）が評判でした。能の方では、梅若六郎が春から秋にかけて、「望月、隅田川、江口、土蜘蛛、葛城」によい能をみせましたのが何よりの記録。宝生九郎も幾度か来名しました。喜之（雲林院）、万三郎（屋島）、権義（砦）の観世三人の活躍に、金剛蔵の「羽衣」の麗姿、豊島の「藤戸」、喜多実の「井筒」がよい思い出。名古屋では殿島修二の「道成寺」もありましたが、大家一二の「邯鄲」が筆頭でしょう。そして狂言や能のない月はありませんでした。東西でも四月の本願寺能と十一月の天皇ご還暦祝賀能、新作狂言、能の発表に、これは金沢でも「彦一ばなし」の上演がありました。稀曲の復演、宝生九郎氏の日本芸術院入りの発表とにぎやかでした。能関係の絵で忘れられないのが一つ。新井勝利の「杜若」につづく「筒井筒」の日本画が院展を飾っていたが、このとき片岡穂子の「幻想」で舞楽の番舞の

「殿」と「納曾利」の舞人の装束の色がしまじる様がおもしろいとおもいました。三七年の狂言や能の世界にはまづ何を求めたらよいでしょう。「名古屋の味」です。名古屋風ということばがよい意味で使われたとおもいます。これは田舎臭いということではない、田舎臭いということ、ローカル性がある、名古屋の味があるということとはちがう。たがいにかみ合っていない、大方は顔の向きがちがう。名古屋の狂言や能には味がある、こういわれる目の近いことをまづ祈りたいとおもいます。これは他の芸能、芸術部門にもいえることとおもいます。すでに獲得しているものもあります。しかしこの世界では、シテ方があるなしの一部門のことではなく、全体として、一人の名人、上手があらわれるよりも、今は、中堅級のメンバーがそろっていることになによりだとおもいます。道は遠いでしょうか。青年楽師もうんと修練せねばなりません。次代を負うこの人たちの責任は大層重い。理論だけではない、何かを、大事なものを今のうちにうんと集積していただきたい。若い人たちが一日おくれれば、狂言や能は一年おくれです。まづ内から固めないで二つとも自分から崩壊してしまわないで。何も若い人たちだけのせいというのではありませぬ。しかし、技芸で生活すると同時に、技芸を誇示し、固守する名

着があるわけです。そしてそれだけの歴史も負っているのです。要は肉体と精神の問題です。観る側もまたそれだけの心構えがいりましょう。何もむつかしいことではありません。昨年金剛の「落葉」が室町で復演されたとき、はからずも、新村老博士のおとなりで、温容に接しながらみていましたが、片隣りはお茶の井口海仙氏の家の方々、香がただよふといつたふん囲気です。ことになごやかな観能でした。知らぬ同志となり合せても、何か心通いながらみることで。まづこれが大事だとおもいます。何といつても「和」が大切です。関西では、金剛能楽堂へいくのは、春日の行事とおなじに、「楽しさ」が味えます。東京は「品のよさ」。さて名古屋は、「なごやかさ」、これこそ名古屋の味に色つける一つでしょう。大きな「和」は大切なものです。しかし、いい加減な妥協はいけません。新春早々、名古屋から京都へ、先代茂山千五郎追善会に「舟渡舞」が参加します。昨年の井上松次郎の上京とともに好ましかったより、吉報を待ちたいと望むのはわたくし一人ではありません。まゝい。

林愿蔵氏を悼む

林愿蔵氏の突然の悼報について柴田初太郎氏にまげて追悼の辞を懇願しました。謹んで哀悼の意を表します。

歌村彦四郎

賀正

ふごや

河文

電話代表 〇一三八一番

トヨダビル

地下一階店

電話 〇一六八番 〇二五八番

地下二階店

とてな

船津屋

電話桑名代表一八八〇番

林君の死を悼む 柴田初太郎

歌占の文句に命は水上の泡風に随つて経廻るが如し魂は籠中の鳥の開くを待つて去るに同じとあります。誠に此世は仮の宿でありますが此様な事ば毎日の仕事で忘れ勝であります。而して乍ら林君の死を目前に見まして、今更乍ら人の世の儚さを必みじみ心に感じました。そして哀惜の念を禁じ得なかつたのであります。思えば林君とは大正の初めの人力車の時代より今の原子力時代迄四十有余年、芸の友、酒の友として又、旅行も百回以上に及んで居ます。最後の旅行八月七日出発の新潟佐渡行が思い出多き最後の旅行に相成とは夢にも考えませんでした。

誠に悲しみの極です。又林君は私の粗忽と引換え頭の綿密な人で名古屋観世会の世話を殆ど一人で引受け命終る迄続けて呉れました。感謝して居ます。此後は観世会発足当時に戻り私の仕事と相成ます。各位の御協力を得て及ばず乍ら観世会の仕事と私の常に念願して居ます第二世の育成に余生を送る考えであります。是が林君を弔う道にも叶う事と存じます。

私も筆不調法それ故下手で誰に頼まれても御断りし已むを得ぬ時は専門の人に作つて貰う事にして何十年も暮して来ましたが林君の追憶の言葉を歌村君より依頼受け、是計りは人に頼む心とも相成らず拙文を顧みず私の心持の一端を記し追悼の辞に代る次第です。

私の歴各銘を序に

知親第一友 知運第一窟  
与病第一利 涅槃第一樂  
(是が一番むつかしい奥習の許です)

お披露 楽師協議会

九月分

水谷 文雄氏 能、大鼓 永田社中  
岩田 圭代氏 竹生鳥シテ辰巳社中  
高田 真六氏 敦盛シテ "

十月分

伊藤 長八氏 石橋太鼓 鬼頭社中  
市橋 益男氏 囃子シテ 丹下社中  
野田 素枝氏 "

十一月分

北原 邦子氏 囃子シテ 内藤社中  
太田 茂子氏 " " "  
前田 幸子氏 " " "  
松原 弘氏 囃子小鼓 後藤社中

倉橋 サダ氏

森 勢津子氏

十二月分

白井美代子氏 囃子シテ 竹内社中  
加藤みね子氏 経政シテ " "  
岩附たつ子氏 杜若シテ " "

山本とよ子氏

中村 克己氏

水野 雅子氏

渡辺 節子氏

近藤 一清氏

浮貝 鋼一氏

編集後記

所得倍増と物価の高騰の追掛けたこの六十一年を送つて金融引締めこの六十二年を迎えました。皆様の為によりよい年であれかしと心から御多幸を祈り上げます。

共同泉社

新年 賀 謹

一 河村 証二 会

石 井 孫太郎 会

博 勝 会

藤 門 久 会

長 生 八郎 会

竜 吟 会

霞 田六郎兵衛 会

澗 水 甲子男 会

観 水 太 会

観 正 秀雄 会

春 星 道子 会

高 安 滋郎 会

た な び き 会

名古屋能楽鑑賞会

名古屋 田鍋 惣太郎

名古屋 植村 真太郎

風 韻 修二 会

幸 友 啓次郎 会

金剛流松風社

掬 水 初太郎 会

曲 水 一雄 会

金 竜 準三 会

春 鶯 仁三郎 会

正 楽 丈太郎 会

松 謡 太 会

祥 雲 虎之助 会

清 風 一 二 社

掬 水 青陽 会

名古屋 和泉 会

名古屋 支部長 田鍋 惣太郎

名古屋 支部長 徳川 義親

狂言 共同社

(イロハ順)

# 狂言

# 狂言

昭和37年2月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区美門前町522  
 井上重兵衛方 電話1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 株式会社 地上社 電話1130

### 狂言人語

茂山千作十三回忌追善能 歌村彦四郎  
 一月十五日 於京都観世会館  
 翁 金剛 巖 茂山真吾 茂山正義

舟渡蟹 井上松次郎 石田 喜樹  
 野村又三郎  
 花子 茂山千之丞 茂山 倅一  
 羽衣 観世元正  
 庵の梅 茂山千五郎  
 通円 茂山弥五郎  
 木六駄 茂山七五三  
 百方 種田治郎  
 唐相撲 大藏弥太郎 外三十余名  
 融 片山博通

右のような番組で催されました、全  
 関西大藏流の大家名人の大曲のうち  
 へ、和泉流の狂言たゞ一番の参加で芸  
 そのもの、批判は別として、無事に勤  
 め得たことを感謝いたしております。  
 舞台は至極結構です、ロビーも広く  
 見所などの雰囲気都らしい気分がた  
 らよい、京都一流の名士が顔を揃え、  
 お茶席では着飾ったお嬢さん達のおて  
 ままでのお抹茶のおいしさ。おわりの  
 唐相撲に至つては王様の楽の舞から全  
 員の唐韻の合唱。まことに長閑な風景  
 で、知らずく、のうちに太平の昔お夢  
 に見ているような錯覚を覚えました。  
 さすがに京都であるなあと、往復い  
 たします。

### 二月の催能

二月四日 宝生素謡会  
 二月十一日 掬水青陽会 十二時半  
 能 能 塚本秀雄 西村欽也  
 能 能 佐藤秀雄

能 杜 若 柴田初太郎 西村弘敬  
 能 天 鼓 佐藤太俊 高安滋郎  
 能 舟渡蟹 井上松次郎  
 二月十八日 観世会 十一時  
 能 弱法師 木原康次 西村弘敬  
 能 草子洗小町 観世元正 高安滋郎  
 能 唐 船 山本博之 西村欽也  
 能 昆布壳 井上松次郎 佐藤秀雄  
 二月二十五日 たなびき会  
 能 弱法師 伊藤睦子  
 能 杜 間 河村 丘造  
 能 卒都婆小町 中村つゆ  
 能 海 女 有賀茲子  
 能 花 争 井上松次郎 佐藤秀雄  
 能 髪 松 河村丘造 佐藤秀雄

### 【三月の予告】

三月四日 九草会  
 能 張 良 伊藤祐茲  
 能 弱法師 伊藤睦子  
 能 杜 間 河村 丘造  
 能 卒都婆小町 中村つゆ  
 能 海 女 有賀茲子  
 能 花 争 井上松次郎 佐藤秀雄  
 能 髪 松 河村丘造 佐藤秀雄

三月十二日 西尾八十祝賀能 九時  
 能 橋弁慶 八田常次郎  
 能 鞍馬参 井上松次郎 河村丘造  
 能 狸 々 山本一 高安滋郎  
 三月十八日 名匠鑑賞能 十二時半  
 能 放下僧 辰巳 孝 江崎真質  
 能 隅田川 宝生九郎 高安滋郎  
 能 葵 上 宝生英雄 江崎真質  
 能 伊文字 和泉保之 井上松次郎  
 三月二十一日 大塚清風社 囃子会  
 三月二十五日 中日五流能 十時  
 能 泰山府君 金剛 巖 西村弘敬  
 能 とりかえばや 茂山千之丞  
 能 二人静 梅若 猶義 福王茂十郎  
 能 智恵子抄 片山慶次郎  
 能 融 観世 静夫 久保田亘亮  
 能 花 月 後藤得三 久保田亘亮  
 能 大原御幸 観世鎮之丞、福王茂十郎  
 能 月見座頭 茂山弥五郎、大藏弥太郎  
 能 張 良 宝生英雄 福王茂十郎  
 能 昆布壳(こぶり)

### 狂言春秋

野村 広三

その大刀を持ち逃げします。  
 狂言に出るおろかな大名の標本であ  
 ります。

元日から、名古屋は雪でしたが、月夜  
 が少ない一月で、夜になると、雪のふ  
 り出しそうな気配で、あくればよく晴  
 れた日であつたりした。そうして月の  
 夜に自分の影を前後にしながら、庭の  
 ある家と家との間の道があるくと、妙  
 に親しみを覚えた。影のない自分だつ  
 たら、昔のあの外国の人のように、さ  
 みしいのではないかと。これは裏があ  
 るといふのではない。「かげ」のある  
 ことは大切なことだ。狂言や能もそう  
 である。狂言や能の世界も、今年こそ  
 はと、おたがいに大きな抱負があるこ  
 とでしよう。そしてもう狂言や能はは  
 じまつています。井上祐一君がずい分  
 と成人した。かつて商工会議所の舞台  
 で「重喜」をあとけなく演じた祐一君  
 が、豊島弥左エ門氏の「田村」の間(あ  
 い)をおだやかに無事つとめたのは  
 朗報です。その日、京都観世会でおな  
 じ「田村」を演能中の大槻十三氏が舞  
 台でたおれそのまま永眠された。「田  
 村」は新春のさわやかさ、春のうらら  
 かさ、「明るさ」のある好曲なのに、  
 明暗二様のスガタに接した。その晩年  
 は、楽屋では故兼資のように、舞台で  
 も、おおまかでおだやかなカタチは得  
 がたいものであつた。「卒都婆小町」  
 と「遊行柳」が思い出です。

正月のテレビ、ラジオで一番楽し  
 かったのは弥五郎翁のテレビ「福の神」  
 (NHK)でした。さて今年の狂言や  
 能は何を語ろうとするか。楽しみにし  
 ています。

謡の動物漫談

西村 弘敬

私共が日常口吟んで居る謡の中に色々の動物の名前が出て来る。虫類魚類は申すに及ばず、鳥類畜類など子細に点検すれば、其の数も中々に多い事が思い出される。先ず虫類では螢を始めとして蟻、蛙、松虫、鈴虫、まきりぎりす、蟬などの小さな物から、扱は大蛇なんて物騒な物迄も出て来る。魚類畜類にも色々な物の名が謡の中に取り入れられて居て、之れ等の一つ一つについて詮索すれば中々に珍談奇聞もある事と思われる。畜類の中でも馬などは比較的多く取り入れられて居る。例えば「百万」の謡に「羊の歩みしまの駒」とか「紅葉狩」の中には「野辺より山に入る鹿の」「馬より下りて香をぬぎ」其の他まだまだいくらでもある。

今年の「えと」は寅年だから虎に関する絵や玩具やら色々な方面に用いられて居るが、謡の中にも少しはある様で、「鶴」(ぬえ)の謡に「足手は虎の如くにて」などある。畜類の中でも猫だけは余り出て来ない様だ。只一つだけある様だから後程語る事とする。其の前に鹿に関する一寸面白い物語りがあるのでそれを先きにお話する。

老女物としてむつかしい謡で「楡垣」という曲がある。其の楡垣の「シテ」の老女は、此謡では熊本近くで白川のほとりに住んで居る様になつて居るが、以前は筑前の太宰府の遊女で、美人の誉れも高く、庵りに楡垣をつくり、風流の心も深く、和歌の道にも堪

能であつて「楡垣の御」(ひがきので)と言われた女であつたが、純友の騒亂の爲め家財一切を失い、老後淪落し流れ流れて肥後の白川辺に住む様になつた。或る時好事家共が集まり、歌の難題を出して試して見ようとて、次の上の句を示して下の句をつけさせた。

「わだつみの中にぞ立てる小男鹿は」

すると楡垣の御は

「秋の山辺を底に見るらん」と見事につけて人々を「アツ」と驚かせたという話が天和物語に出て居る。之れも謡曲楡垣につながる一挿話と云えよう。

扱次は猫の事だが「遊行柳」の謡の「くせ」の中に「手飼いの虎の引づなも、永き思ひに奈良の葉の、其の柏木の及びなき」とあつて、猫とは直接に言わず「手飼の虎」としてある。そこで遊行柳と猫とがどうゆうつながりがあるかが問題となる。夫れには先ず柳と蹴鞠(けまり)との関係から説明しなければならぬ。現今では「フットボール」にも色々な方式があつて「ラグビー」とか「サッカー」とか勇壮な「スポーツ」が行われて居るが、我が国でも平安朝時代には、殿上人(公卿等)の遊びとして蹴鞠(しうきく)が行われた。之れにもそれぞれの「ルール」もあつたらしく、其の家元には飛鳥井家(あすかいけ)という家柄もあつて、其の伝授を受けて行なつたものと

能であつて「楡垣の御」(ひがきので)と言われた女であつたが、純友の騒亂の爲め家財一切を失い、老後淪落し流れ流れて肥後の白川辺に住む様になつた。或る時好事家共が集まり、歌の難題を出して試して見ようとて、次の上の句を示して下の句をつけさせた。

「わだつみの中にぞ立てる小男鹿は」

すると楡垣の御は

「秋の山辺を底に見るらん」と見事につけて人々を「アツ」と驚かせたという話が天和物語に出て居る。之れも謡曲楡垣につながる一挿話と云えよう。

「クラウソド」は蹴鞠の庭といつて、其の四方の隅々に柳の木を植えて境界を示してあつた。遊行柳の謡にも「蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝垂れて、暮に数ある香の音」とあるのでも知れる。

扱猫との関係であるが、之れは源氏物語の若菜の巻にある事で、致仕の大臣(ちしのおとど)の子息で柏木という人(之れは葵上の甥に当る人)が、光源氏の子息の夕露やら、螢兵部郷などの人々と共に、光源氏の六条院の邸の広庭で蹴鞠の遊びをして居たところ、御殿の御簾の中から一匹の小猫が走り出て来た。其の猫には首に紐が附けてあつた為め、御簾の一端がまくれ上り、中の様子が外から見える様になつた。其の時簾の内には女三の宮(朱雀帝の第三姫宮)が立つて居られたお姿を、柏木が認めて、其の麗わしい御姿に忽ち「ポーツ」となり、それ以来熱烈な恋心を起して、色々と艶書などを送り盛に「モーシヨ」を掛けた。之れが謡にある「其柏木の及びなき、恋路もよしなしや」と謡われてある処である。依つて之れを振り返つて見ると、柳——蹴鞠場——柏木の蹴鞠——猫——女三の宮という様に廻り廻つて猫が出て来た。其の猫も明らかに猫とは言わず、手飼いの虎などと表現されて居る。動物の話から飛んでもない方角へ発展して仕舞つた。之れも漫談だから致し方もあるまい。

（お託び非新入会員紹介及お披露は紙面の都合により次号に別号しました）



老舗 信用第一  
(古本最高価買入)

前通電停 赤中區屋古 電話 24 3 4 1 0

文光堂

各種新刊書籍・雑誌  
各宗仏書とお経本

# 狂言

昭和37年3月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町5/2  
 井上重兵衛方 電1430  
 名古屋狂言共闘社  
 印刷所  
 株式会社 地上社 電1196

### 狂言人語 歌村彦四郎

### 和泉保之師に

### 名古屋演劇ペンクラブ賞

名古屋演劇ペンクラブ（会長清水箱四氏）は今回和泉保之師に「朝日狂言会名古屋和泉会出演の「花子」「蝸牛」などの好演と、宗家として活発なる名古屋での狂言活動に対して」名古屋

六月三日 午後一時始  
 於 熱田神宮能楽殿

### 第四回 朝日狂言会

- 猿 賀 佐藤秀雄 河村丘造
- 千鳥 茂山七五三、茂山千五郎
- 素囃子
- 茶子味梅 和泉保之、野村又三郎
- 鎌 腹 茂山千五郎
- 榊 佐藤卯三郎 歌村
- 榊 井上松次郎 彦四郎

演劇ペンクラブ賞を贈られることになった。授賞式は三月十八日熱田神宮能楽殿に催される名匠鑑賞能の折行はれる。名演ペンクラブが視野を広くして能、狂言界から選ばれたことに賛意を表します。

### 三月の催能

三月四日 (日) 九草会 午前十時	能 張 良 伊藤 祐茲 森 茂好	能 弱法師 伊藤 睦子、西村 弘敬	能 杜 若 森川みどり、高安 滋郎	能 卒都婆小町 中村 つゆ、森 茂好	能 海 士 有賀 滋子、高安 滋郎	能 花 争 佐藤卯三郎、井上松次郎	能 瘦 松 河村 丘造、佐藤 秀雄	三月十一日 西尾八十祝賀能八、三〇	能 橋弁慶 八田常次郎	能 猿 々々 山本 一、高安 滋郎	能 鞍馬参り 井上松次郎、河村 丘造	三月十八日 名匠鑑賞能 十一、三〇	能 放下僧 辰巳 孝 江崎 直賢	能 野口 録久	能 偶田川 宝生 九郎、高安 滋郎	能 葵 上 宝生 英雄、江崎 直賢	能 井上礼之助 井上松次郎	能 伊文字 和泉 保之 河村 丘造	能 井上松次郎 井上松次郎	三月二十五日 中日五流能	一部 能 泰山府君 能 花 月	能 二人静 能 大原御幸	能 融 能 張 良	能 とりかえばや 能 月見座頭	四月一日 山本観とう会 午前九時半
-------------------	------------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------	-------------------	--------------------	-------------------	------------------	---------	-------------------	-------------------	---------------	-------------------	---------------	--------------	-----------------	--------------	-----------	-----------------	-------------------

### 四月の予告

能 龍 野 加藤 子 高安 滋郎	能 海 士 村田 西村 欽也	能 竹生嶋参り 野村又三郎、河村 丘造	能 四月八日 橋岡受賞祝賀能	能 鬼頭五朗 和泉 保之	能 三番叟 井上 祐一	能 面 箱 岡田 頼允	能 高 砂 佐藤 秀雄	能 羽 衣 佐藤 秀雄	能 通小町	能 乱	能 福之神 井上松次郎 河村 丘造	能 志びり 歌村彦四郎、和泉 保之	能 四月十五日 観世会	能 通 盛 橋岡 久共	能 花盗人 河村 丘造、佐藤卯三郎	能 百 萬 柴田初太郎	能 天 鼓 井上礼之助	能 大 槻	能 四月二十二日 吉田方条追善 午前十一時	能 通小町 観世 喜之、西村 弘敬	能 道成寺 大槻 秀夫、高安 滋郎	能 井上松次郎	能 布施無経 河村 丘造、佐藤卯三郎	能 石 橋 観世 武雄	能 四月二十八日 和調会	能 鉢 木 和島富太郎	能 喜多 実	能 二階堂 野村又三郎	能 鐘ノ音 野村又三郎、井上礼之助
------------------	----------------	---------------------	----------------	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------	-----	-------------------	-------------------	-------------	-------------	-------------------	-------------	-------------	-------	-----------------------	-------------------	-------------------	---------	--------------------	-------------	--------------	-------------	--------	-------------	-------------------

### 三月の狂言解説

#### 花 争 (はなあらそい)

花見に出ようとした主従、ひねくれ太郎冠者が花見ではない桜見だごてます。「桜散る木の下風は寒からで

……」と例を引けば主は「花や今宵のあるじならまし」と云つた具合、ゆきつまつた太郎冠者、それでは謡でと「桜かざしの袖ふれて……」そのあとが「花見車」とあつてはかぶとを脱ぐほかありません。

瘦 松 (やせまつ)

瘦松、肥松とは山賊の合言葉で仕合せの悪いのを瘦松と云う。今日よい仕合せを致さうと長刀を携へて待ちかまへるところへ、里帰りの女が急いで通りかかります、女をおどして持ちもの取りあげて喜んでゐるうちに、長刀を女に取られさんぐにおどされ又今日も瘦松に終ります。

鞍馬参り (くらままいり)

初寅の日に鞍馬へ参詣した主従二人、神前にて通夜するうち太郎冠者は多門天から福を授かつたとほこらしげに云う、主はそれは自分に授かつたものだから渡せと云う、そこで福渡しと云うことをして渡すことになりました。

#### 伊文字 (いもぢ)

いまだ定まる妻のない主人、太郎冠者を供に連れて清水の観世音に祈誓をかけ、お告げの妻に出合います、お迎ひに行くがお宿はと問へば「恋しくば問ふても来ませ伊勢の国、伊勢寺もとに住むぞ妾は言ひ残して立ち去つた。あまりに突然のことでの歌を忘れてしまい、通行人をとらへて忘れた里の名を聞き出さうと苦心します。

竹生嶋参り (ちくぶしままいり)

竹生島へ抜け参りをして主に叱られた太郎冠者、許されて何か變つたことは無かつたかと問はれ、とつきの思いつきで神前のかたわらの芝生で辰、犬、猿、蛙、くちなわ、が集会をしてゐて、何れも立ちぎわに秀句を云つたと話しましたが、くちなわの秀句にまつて「石蔵の中へぬらぬら」と申しました。

狂言春秋 野村広二

狂言や能には「ながれ」ということがあるとおもいます。狂言一番、能一番にしても、全体として、どういふ工合に演ぜられていくかが、まづ、ながれというものでしょう。先頃「求塚」(宝生九郎)をみました。この「ながれ」がありませんでした。ワキ、シテとツレの出、シテとワキ、後半とつなかりがうすく、いつまでたつても感興が高まつてこない「老女」のすがたや「通小町」の映像もみられて、結局作品全体としては失敗作とおもいました。物著(ものぎ)があつても、間(あい)が出て、一段一段つみ重ねていくのです。ながれがきれてしまうと、もう舞台の充実感はない。狂言もそうです。またこれと反対のこともいえよう。「法師が母」(野村又三郎)がそうで、これはまた流れつばなしで、しまるところがない、止るところがない。お茶では茶碗を三回半拭う。井口海仙氏は、ふとしたことからこれに疑問をもち、あらためて三回茶碗をまわして拭われたそうだが、びつたり

こない。あとの半回転をやらないと、うまくおさまらない。三口半に飲むことも、この半口がとても大事なことで、その随筆集「竹蔭抄」に書きとめておられる。おさめることもまた忘れてはなるまい。どちらも部分のよさはあつても、全体としてはよくないのです。

三月には、和泉保之君の名古屋演劇ペンクラブ賞授賞式があるし、大きな催しがつづきます。期待しましょう。

業平の高安通い

西村弘敬

謡曲「井筒」は風吹けば沖津白波菴田山夜半にや君が独り行くらんとある歌を本として作られたものかと思ふ。此の主要人物たる在原の業平と紀の有常の娘との恋物語ほどの程度迄事実であるかが私の貧弱な史観では実の処わからない。私の疑問とする処は、此の二人の住んで居た所は石の上(いそのかみ)といふ処で、奈良県の樺本(いちのもと)の近くであり、又業平が忍んでかよつて行つた先は「河内の国高安の里に知る人ありて二道に」と謡にある通り河内の国で之れは生駒山系の南端近き信貴山(しぎさん)の西の麓の辺で高安の里といふ所であつたらしい、そこで住居して居た石の上からは此の高安の里迄地図の上で直線距離で計つても約二十キロ(五里)余りある、昔の道で曲り曲つて其の上を山を越へて行くとするれば、其道程は凡そ六里以上になる事と思はれる、斯様な遠い道のりを夜の中に忍び忍びにしか、只の一人で行くなどとは到底出来るではない様に考へられるからで

ある。今日の様な自動車など便利な乗物で走らせても相当に時間を要すると思はれるのに、昔の事とて早い乗物ともななく、山道も相当峻しいのに格別屈強な人ならばいざ知らず、業平ともあらふ優さ男が、夜の夜中にひとりぼつぽつと歩いて行つたとはどうも受取り難いがどうであらう。

然し此の物語りは、伊勢物語にも大和物語にも又謡曲高安にも出て居るし、又石の上には在原寺の旧跡も有るとの事で全く根も葉も無い空事(そらごと)でないかも知れない、殊に井筒の謡は文章も美しく綴られ節附も婉麗に出て居て一般に愛吟せられて居るし、又此の演能も優美なる三番目物として親しまれて居る曲で、今更余計な詮索など不必要かも知れないが、どうも筋の上には腑に落ちぬから茲に少々不審を述べた次第で、此の詳細の史実を御承知の方に御教示を仰ぎたいと思ふ。

新入会員紹介

能楽協会名古屋支部  
宝生流(小瀬静雄、鈴木義久、戸田秀雄、野口義次、浜村義雄、吉田俊彦)

お披露

中尾満寿子さん	囃子シテ披	有賀社中
清水むつ子さん	〃	〃
宮崎ちよ子さん	〃	〃
荒川ちよ子さん	〃	〃
中村ちよ子さん	〃	〃
北村 房枝さん	〃	山田社中
間下 藤平氏	能鶴亀シテ	加藤又社中
菊屋 稔氏	〃羽衣	〃
浅井 保氏	〃土蜘蛛	〃
塚田 常子さん	囃子シテ	増田社中
長谷川 実氏	能羽衣シテ	加藤長社中
米本 康平氏	囃子シテ	前田社中
菊屋 稔氏	〃	福井社中
龜山 盛一氏	〃	河村社中

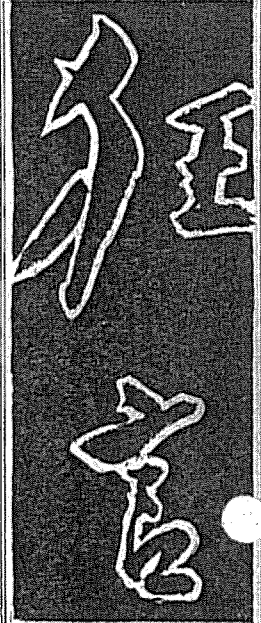
石田特許事務所

士 理 士 石 田 一  
法 学 士

名古屋市昭和区都島町2の10

TEL (88) 1330





昭和37年4月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町5/2  
井上重兵衛方 電話1430  
名古屋狂言共闘社  
印刷所  
株式会社 地上社 電話1196

狂言人語

歌村彦四郎

例年の朝日狂言会も間近に迫りました。大蔵和泉の稀狂言を揃えてのこの会も第四回を迎えて増々好評を得ております。事ひとえに皆様の御支援と出演者各位の熱演の賜と後援の朝日新聞側の熱意によるものと今更乍ら感謝にたえませぬ。  
何卒今回もよろしく御支援下さい。

和泉保之氏の名演ペンクラブの受賞式も無事終了、和泉氏もこの感激に胸を張り一層稽古にはげまれる由、同好の士の御入会を待ちませう。

四月の催能

四月一日 博勝会

能 熊 野 高安 滋郎  
能 海 士 西村 欽也

狂 竹生嶋参り 野村又三郎 河村 丘造  
四月八日 橋岡受賞祝賀能 九・三〇  
翁 鬼頭五朗三番叟 和泉 保之  
能 高 砂 岡田 頼允 高安 滋郎  
能 福の神 井上松次郎 河村 丘造

狂 羽 衣 佐地 耶山 佐藤 秀雄  
狂 しびり 歌村彦四郎 西村 欽也  
能 通 小町 伊藤 長八 高安 滋郎  
能 乱 前田 熊太郎 西村 弘敬

四月十五日 観世会

能 通 盛 橋岡 久共  
能 百 万 井上松次郎

能 天 鼓 大槻 井上礼之助  
狂 花盗人 河村 丘造 佐藤卯三郎  
四月十八日 蔵島神社奉納  
能 高 砂 井上松次郎

狂 鐘ノ音 井上松次郎 歌村彦四郎  
能 橋 弁慶 井上松次郎

四月二十二日 吉田方条追善  
能 通 小町 観世 喜之  
能 道 成寺 大槻 秀夫 高安 滋郎

狂 布施無経 河村 丘造 井上礼之助  
四月二十八日 和調会 佐藤卯三郎  
能 巴 和島 井上松次郎

能 鉢 木 喜多 実 山本光次郎  
能 狸 々 野村又三郎  
狂 鐘ノ音 野村又三郎 井上礼之助  
四月二十九日 幸友会

五月の予告

五月三日 林間門会

能 通 小町 河村 鉦二  
能 鞍馬天狗 井上松次郎

狂 雷 井上 二 河村 丘造 佐藤 秀雄  
五月五日 上田隆一追善 観正会  
能 安 達原 松井 省吾 高安 滋郎

狂 お冷し 石田 喜樹 井上松次郎  
能 融 久田 秀雄 西村 欽也  
五月十三日 能楽クラブ  
翁 三番叟 井上 祐一  
能 小袖曾我 山本光次郎

能 草紙洗小町 井上松次郎  
能 殺 生石 井上松次郎  
狂 文 山賊 野村又三郎 井上礼之助  
五月二十日 中部金剛会  
能 巻 絹 大塚 一二

能 雲 雀山 金剛 殿  
狂 蟹山伏 井上松次郎 佐藤 秀雄  
五月二十七日 掬水会 佐藤 秀雄  
能 采 女 石谷 初藏

能 熊 坂 谷野 博  
狂 言解説 歌村彦四郎  
三番叟(さんばさう)  
翁はシテ方、三番叟は狂言方が等量に勤める、千歳は上掛り(観世、宝生)ではシテ方下掛り(金剛、金春、喜多)は狂言方の面箱が勤めます。  
翁が幕に入ると大鼓の操み出しと云う打かけで舞台に入り、操ノ段を勇壮に舞い一たん後見座に入り黒式尉の面をつけ今度は狂言に舞います。  
若い和泉流の宗家に期待します。  
福の神(ふくのかみ)

脇狂言としてお目度い狂言であります。気の合つた同志が毎年西ノ宮に参詣します、時分を計い豆をはやしませ、福の神も年毎の参詣を感応ましまして大笑いで出現します。

いつもいつも使いに出来る太郎冠者、今日も又使いを云いつけられたがしびりが起つて歩かれぬと断る、一策を案じた主の方便にうまうまとのつて、しびりがなかつたと云いますがおつたら使いにに行くと云はれたアアイタイタ。

此の狂言は少年向きのものですがお祝いの意味でおめだるいことですが老年で勤めます。

花盗人(はなぬすびと)

花の余りの見事さについて一枝、主筋に所望されて又次ぎの日、今度は待ちかまへた花主に見とがめられました。述懐の上「この春は花のもとにてなわつきぬ、烏帽子桜と人や云ふらむ」と一首の和歌を読みゆるされます。  
盗んでも花盗人になると何か暖かいものが感じられます。

布施無経(ふせないきさう)  
壇家へ月経に来た僧、続経がすんでも毎回貰う布施がなかなか出ません、忘れられては今後に影響しますので、気づかせようと苦心しますがとんと通じません、思案のあげく袈裟を忘れたと引かへしとうとう物にします。  
河村丘造氏親ゆづりの名品であります。

鐘の音(かねのね)

我が子の成人に黄金作りの太刀を与へんと太郎冠者を呼び出し、鎌倉へ黄金の値を問ひ合せて出します。ところが太郎冠者は鐘の音と間違ひして、建長寺、円覚寺など五山の鐘をついては

音を聞いて廻ります。のどかな太平の御代を思はせませす。

繪巻と能

仙田雪山子

飛鳥、奈良の時代から江戸明治に亘る日本諸文化芸術は所謂儒、仏、老、神の思想を基盤として無縁ではあり得なかつた、平安朝初期頃までの芸術の多くは宗教的奉仕の域に発展をもつたが中世以後の芸術は芸自体に個性的芸道が自覚され芸道が成立した、中世前紀に勃興しつゝあつた庶民的芸術傾向は

国風抬頭の歌道文学に現はれ、繪巻とゆう繪画形式の上に活躍することとなつて芸術は庶民鑑賞との対決となつて特に演劇舞歌は鑑賞とは一如確立の風潮の段階に隆盛を極めた、能楽は狂言を含めて時代の自然的要求起因をもつて誕生したのであらうが能楽が伝統芸道に結晶されたについては観阿、観世、禪竹の天才と努力により過去の文獻は余す余地なく涉躰され、取捨され、現世の感得集大成に不易の芸道哲学をもつに致つた、しかし演能が劇の要素としての範圍にあつて繪巻との関連は見逃せないものと思はれるのである。

繪巻は唐の張彦遠著(歴代名画記)

には繪巻として後漢の明帝(五八―七五)に記載されているが日本では六世紀後半(八九四)繪因果経、現在因果経が現在するが鎌倉期を頂点として室町期(十五世紀から十六世紀)に後退した繪巻の形式をもつ繪画であつて「詞書の繪画化」であり「繪画と文章の結合」「説話的表現」「人生哀愴の投影」「物語の連続展開の鑑賞」等挙げれば繪巻の舞台は演能とに合点一致の多くが見られるのである。繪巻の内容が演能の動く芸術へ転身されたとも庶の交替とも考えられるのである、能楽を極めを知ることは容易ならぬものである

が喜怒哀楽の人間像と自然風花季節との調和をもつたことが日本芸道凡その根柢でもあり観念ともなつていたことは否定は出来ないと思はれる、日本伝統芸術の全身が世界視野のうちに投出され民族独自性が競いにいたる課せられた段階とすれば一層伝統芸術がいばう認識が行はれることであらうと考えられるのである。

(筆者は能画家)

狂言春秋

野村広二

狂言の世界で朗報が二つ。一つは三月十八日、和泉保之君が三十六年度の名古屋演劇ペンクラブ賞をうけたこと。名匠鑑賞能の当日、演能後の見物席の足をとめて、清水ペンクラブ会長から、昨年の名古屋伝統芸能によせた努力をほめ、その前途を祝福され、万雷の拍手のなかで、おくられた。楽しいひとときであつた。いよいよ稽古と人間形成に精進されるよう。そして今年も活躍を期待したい。今一つは東京のこと。茂山弥五郎翁が野村万蔵と「武悪」を共演。名人万蔵以上とその芸をみとめられたそう。弥五郎翁と金春八条は不世出の名人。芸術院入りも可能な二人です。

さて、二月の観世会で、能組のことが気になつた。「弱法師」「草紙洗小町」「唐船」。前後の曲が親子のめぐりあい。「唐船」を見おわつて、何か心重さを払いのけられなかつた。もうひとつ、ハリハリとした曲がみだかつた。今でも、どこまでも、「序破急」の理論をより所とするのだから、気のほかいりときは特別演出を試み、そのほかいろいろ心配りをするのだから、あのときは、どうも偏向をかんじ、不満でならなかつた。「弱法師」(木、次)がよかつたうえに、「唐

船」(山本博之)の出来がすばらしくよかつたので、よけいにその感が強かつた。観世流のウタイだけをきかせるのではない。謡本に囃子と註のついた箇所だけに重点がおかれるのではない。観世流の能を、二番立、三番立てみせるのであらう。勿論見せどころ、聞せどころを含めて。ウタイといへば、この流儀は地謡にもつと注意を払つてほしい。地謡は扇を立ててウタつていられるだけではない。曲趣を物語つていく大切な役目です。

今年世阿弥が生まれてから六百年目に当ります。三月の中旬には、大仏次郎と家永三郎の両氏が、「芸の上」でなく、人生の賢明な教師(朝日)、「片や」民族文化の形成に偉大な役割を果たした(中日)と発言しておられる。また、歴史小説で「世阿弥」(滝川駿、圭文館)もでた。

最後の消息では、観世寿夫君が近くフランス留学に出發する由、この楽しい知らせにひきかえ、奈良では、春日の権宮司で、舞楽にくわしく、三月の薪能や十二月の「おんまつり」の世話人だつた堀川稚堂氏が三月十七日に逝去された。古典芸能の知己を、白い桃の花がまだ咲かぬ、春浅き一日に失つて、まことさみしかつた。

お披露目のお知らせ

楽師協議会

- 一、七前田裕子さん 能教盛小鼓
- 二、二五 後藤孝一郎氏 石橋
- 白木豊氏 翁ワキ小鼓
- 二、二一 田口亮太郎氏 能狸々大鼓
- 佐野徳司氏 囃子、大鼓
- エミオ・ナニ 氏
- 河村繪一郎社中
- 田鍋惣一郎社中

御観光に  
御商用に

名古屋駅前トヨビル南側

日本観光旅館連盟  
日本交通公社  
日本旅行社  
近畿日本ツーリスト

旅館むさし家

電話 1396~8

# 狂言

## 狂言人語

歌村彦四郎

朝日狂言会の番組詳細を發表致します。にぎしく、此顔ぶれ多数御鑑賞下さいませよう。誌上を借りて提灯もちを

### 第四回 朝日狂言会

京都大藏流、茂山千五郎父子  
東京和泉流宗家、和泉保之氏  
六月三日 午後一時  
於 熱田神宮能楽殿

猿 賀	河村 秀造	井上 祐一	井上 上義
千 鳥	茂山 七五三	山本 光次郎	井上 上義
茶子味梅	和泉 保之	井上 祐一	井上 上義
鎌 腹	茂山 千五郎	比果 光真	井上 上義
称宜山伏	井上 松次郎	河村 彦四郎	井上 上義

会員組織  
入会申込所  
A、朝日新聞社企画課 電話 二二八一三二  
B、熱田神宮能楽殿 電話 六九二九二二  
C、中区裏町五ノ二 電話 三二一四三〇

主催 朝日新聞社  
狂言共同社

昭和37年5月1日発行  
発行所  
名古屋市中区英門前町5ノ2  
井上 重兵衛 電話 1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
株式会社 地上社 電話 1198

### 五月の作能

五月三日 林間門会 九三〇	能通 小町 河村 鉦二 高安 滋郎	能馬 天狗 井上 松次郎 西村 弘敬	五月五日 久田親正会 九〇〇	能安 達原 松井 省吾 高安 滋郎	能雷 五月十三日 能楽クラブ 九三〇	能お 融 石田 秀樹 井上 松次郎	能融 五月十三日 能楽クラブ 九三〇	能小 袖曾我 河村 良信 又吉	能羽 衣 伊藤嘉奈子 西村 欽也	能草 紙洗小町 植村 真太郎 井上 礼之助	能殺 生石 井上 松次郎 西村 弘敬	五月二十日 中部金剛会	能卷 綱 大塚 一二 高安 滋郎	能雲 雀山 金剛 巖 西村 弘敬	五月二十七日 掬水会	能采 女 石谷 初藏 西村 弘敬	能熊 坂 谷野 博 高安 滋郎	五月二十九日 佐藤卯三郎 山本光次郎
---------------	-------------------	--------------------	----------------	-------------------	--------------------	-------------------	--------------------	-----------------	------------------	-----------------------	--------------------	-------------	------------------	------------------	------------	------------------	-----------------	--------------------

### 狂言解説

雷(かみなり)  
武蔵野の真中に来合せたヤブ医者、俄かな雷雨に逢ひ、くわばらくわばらとかがんでる眼の前へ雷が落ちて腰を打つて立てない、幸い医者針を打つてと云う。恐る恐る雷に針を打つ、強い

管の雷が人間以上に痛がるおかしさ。  
お冷し(おひやし)  
涼をもとめて清水へ来た主従、おひやしと水との語路ちがひを争ふ。

文山賊(ふみやまだち)  
仕事を仕損じた二人の山賊が云い争つた挙句、勇しい闘争を展開する然し人に知られずに死ぬのは残念と書置を残すことになりませう。

蟹山伏(かにやまぶし)  
法力の強い山伏が能力を供に連れて山中を通ると、一天俄にかき曇り一大音響とともに出現した怪物、「二眼天にあり一甲地につかず、大足二足小足八足、右行左行して世を渡るもの、精ぢや」と云う、小さな蟹を大きく狂言化した作者の努力には感謝の外ありません。

### 京都の旧跡をめぐって

田鍋惣太郎

三月二十一日大阪の山中能に班女、一調一管を藤田とともに勤め京都に入り木屋町の松華楼に泊る。翌二十二日京都在住の画家仙田雪山子と歌村君の厚意で新品の小型バスを大阪より廻送され、我々家族の外仙田氏夫人排詰「高原」の主宰者奥田雀草氏夫人など総勢十八人の団体となつた。  
午前十時宿を出発、洛北貴船に向ふ、上加茂から宝が池、ゴルフ場を過ぎ鞍馬山と貴船山の谷間に入る、貴船川に沿ふ参道は杉の大木でおおはれ天日を通り屋敷のお開き肌寒さを覚える「鉄輪」にふさわしい雰囲気。参拝をすまして逆戻り、鞍馬山を迂廻して大原山の奥、寂光院を訪れる。安德帝の母、建礼門院が平家滅亡とともに幽居

されたところ、のち後白河法皇が訪ねていかれるくだりが「大原御幸」である。当時の作しさがしのばれる。天台宗の尼寺で今日も有髪の尼さんが案内される。

寂光院へゆく途中、一本橋の真中で歩けなくなつて立ち往生、情けなくも病弱の歌村君に手をとられて渡る。

大原みち一本橋で手を引かれ寂光院の途中にて

寂光院しぐれにあいて途遠し本堂礼拝

翠黛の山と謡で聞かされて

丁度おひるともなれば石段下の茶店に陣どりしばしの憩ひ、持参の伊勢長の弁当を開く、世話方の機転で特級酒のあつ畑が待つてゐた、

思はずも畑ぎけに逢いあら嬉れしこのあたり「大原女」と「しば漬」の本場として有名である。大原女は美しい、しば漬はうまい。これで前半を終り、後半に入る。(以下次号)

狂言春秋 野村広二

四月二十一日の土曜日、夕方のひととき春雷があつた。うすあかるい空をどろどろと鳴りひびく様にも春の気色がこい。先日東照宮のおまつりにはまだ舞楽をみる人たちに花吹雪がしまりだつたが、もうどこも紅葉のあかい葉の色が青葉の立木の間に目立つ時節になる。

伊勢でも金春流の奉納能があつた。好天気だが、今年はずらはまだ早かつた。「加茂」(金春欣三)「藤戸」(金春信喬)「融」(本田秀男)に伊勢の狂言「盆山」(大蔵流)、今年で十回を数える。翌日は鶴世、そのまた翌日は喜多流の奉納があつた。別の日に伊勢の狂言(竹風会)が一日つとめ

た。当日は能みる人たちに舞楽の管弦と大太鼓がゆたかに鳴りわたつて、心をなごやかにしていた。

この間「通盛」の前半で、シテの橋岡久馬がツレの小宰相の局(久共)にその入水の様子をとよかたろうと、やさしくさそいかけるところが何ともいえよかつた。あのときのツレのオモテと唐織はいつまでも印象にのこる。

「通小町」とはちがうし、なぜか、ダンスが地獄で、フランチェスカと愛人の青年から悲恋にたおれたいきさつを語られる佳処がおもい出された。しかしそれより明るさがある。また、今年になつて、子方の出る曲が多かつたが、子方の少年諸君がしつかり演じたので充実した曲をみせてもらえた。たとえば、中日五流能の新作狂言「とりかえばや」(平岩弓枝作)の茂山真吾君、正義君の方は昨年東本願寺能で千歳の大役を無事つとめたが、真吾君も実にすばらしい演技で感嘆させた。あの狂言は、後半の展開部からおわりにかけて、七五三の工夫考案をもつてしても、わるいやらしさがのこる構成だが、それをすくつていたのが、真吾君の演ずるとなりの娘のすなおで初々しいスガタであつた。狂言でも、能でも子方の出る曲は子方を軽視してはいかない。狂言や能の構成は、メンバーの方がひどいびつたどと、そこから水がもれてやがては堤をくづすように、どうにもとりかえしのつかない破目になるものです。そうでなくても、わづかなこと好記録といえないときが実に多いようです。

四月から五月にかけても、演能はにぎやか。徳川美術館には能、狂言装束展覧会、松坂屋では江戸文化展があります。緑の五月もよい狂言や能がみられる、祈りたい。

六月の予告

六月三日 朝日狂言会 一、〇〇  
番組別掲の通り  
六月五日 奉納  
唯子 六番

小舞 石河藤五郎 佐藤卯三郎  
番匠 屋 河村 丘造  
六月十日 青陽会  
能部 耶 久田 秀雄 西村 弘敬  
能半 蒨 石田 喜樹 西村 欽也

能 春日竜神 山本 勝一 高安 滋郎  
能 杭か人か 河村 丘造 佐藤卯三郎  
六月十六日 和調会  
船 舟 慶 西川 司津 高安 滋郎

能 竹 生 嶋 観世 喜之 高安 滋郎  
能 芭 蕉 観世鉄之丞 西村 弘敬  
能 熊 坂 片山 博通 西村 欽也

能 悪 太郎 井上礼之助 井上松次郎  
六月二十三日 宝生定式能 佐藤卯三郎  
能 花 月 辰己 孝 西村 弘敬

能 国 栖 宝生 英雄 高安 滋郎  
能 河村 丘造 佐藤 友彦  
能 箆 屑 佐藤卯三郎 井上礼之助  
井上 祐一

六月二十四日 学生宝生全国大会  
お披露目のお知らせ 楽師協議会

四月一日 観こう会  
唯子 シテ 山本社中 (伊藤一枝さん・大村恵美さん・中島とも子さん・川瀬とよ子さん)

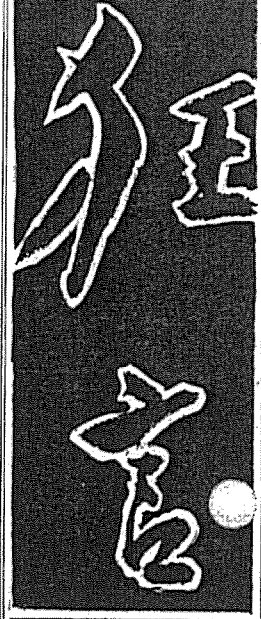
四月八日 皇大神宮ニテ  
翁 小鼓 福井社中 (中尾和子さん・辰美杉美氏・大森英二)

凡ゆる工業用品御用達  
機械工具商  
株式会社 水藤商店  
名古屋市熱田区神戸町一五一番地  
電話 代表 〇五二三一

株式会社 スイトウ製作所

プレス钣金並に 名古屋市瑞穂区熱田東町神明前六八  
機械加工工場 電話 〇八二二五・八四〇一

鉄骨、橋梁 名古屋市南区豊中町三ノ十一  
及び製缶工場 電話 〇八三一・八七六八



昭和37年6月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町6ノ2  
井上辰兵衛方 電話1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
株式会社 地上社 電話2106

狂言人語

歌村彦四郎

○和泉宗家のおめでた

五月二十三日狂言  
和泉流の宗家保之氏  
は、酒井忠正氏の媒  
約にて山野辺洋子氏  
と華燭の典を挙げら  
れ、東京「光輪閣」  
にて賑やかに披露がありました。因に  
新婦は先代出羽海方の方の愛娘誠に力強  
い良縁で若い宗家の前途を祝福いたし  
ます。



○永田虎之助氏舞台引退

大蔵流大鼓方の同氏は永年斯道のた  
め尽されましたが今回老齢のため引退  
を發表されました。  
六月五日熱田能楽殿に於て能楽協会  
名古屋支部として記念品贈呈式を行  
います。

六月の催能

- 六月三日 朝日狂言会 一、〇〇  
猿 舞 佐藤 秀雄 河村 丘造他  
千 鳥 茂山 七五三 比果 光真  
茶子味梅 和泉 保之 野村 又三郎  
録 腹 茂山 千五郎 井上 松次郎  
小 舞 北果 光真 茂山 七五三  
称宜山伏 佐藤 卯三郎 河村 丘造  
六月五日 奉 納 井上 松次郎 歌村 彦四郎

小舞 唯子六番

- 六月十日 青陽会 佐藤 卯三郎  
能 郡 間 番 匠 屋 河村 丘造  
能 半 間 石田 喜樹 西村 弘敬  
能 春 日 竜 神 山本 勝一 高安 滋郎  
能 抗 か 人 井上 松次郎 佐藤 卯三郎  
六月十六日 和調会 高安 滋郎  
能 舟 弁 慶 西川 司津 高安 滋郎  
六月十七日 観世会 高安 滋郎  
能 竹 周 観 世 喜 之 高安 滋郎  
能 芭 蕉 観 世 鉄 之 丞 西村 弘敬  
能 熊 坂 井上 松次郎 西村 弘敬  
能 熊 間 片山 博通 西村 弘敬  
能 悪 太郎 井上 礼之助 井上 松次郎  
六月二十三日 宝生定式 佐藤 卯三郎  
能 花 月 辰 己 孝 西村 弘敬  
能 国 間 佐藤 秀雄 高安 滋郎  
能 国 間 河村 丘造 佐藤 友彦  
能 簾 間 佐藤 卯三郎 井上 礼之助  
六月二十四日 学生宝生全園大会 井上 祐一

狂言の解説

歌村彦四郎

杭か人か(くいかひとか)  
臆病者の太郎冠者があまり強がりや  
云いますので、主人は二、三日の予定  
だと云つて留守をするよう諭を用心に  
与えて外出します。太郎冠者は感心に  
夜廻りに出ましたが、主人のいやがら  
かしに立っているのを盗人と思ひ込み

宝ものの有りかを致(せう)程に、命  
をお助けなされと哀願します。主人も  
あきれてしまいます。  
悪太郎(あくたろう)  
心にかけて意見する伯父を、酒を喰  
い酔い大長刀を振りまわして悪てい  
つく悪太郎もとうとう道端に寝入つて  
しまいます。伯父があとをしいて来て  
髭も頭も剃つて僧形に変え「南無阿弥  
陀仏」と名付けて立ち去ります。目を  
覚ました悪太郎はこれも仏の戒めとき  
とり、後生を願う決心をいたします。  
人の性は善なりと申しますが、これを  
諷刺したすぐれた曲であります。  
簾 屑(ひくづ)

屑茶を挽かされる太郎冠者は、コク  
リコクリと居眠りするところへ使から  
戻つた次郎冠者が、気の毒に思つてい  
ろいろと話をしたり、舞をまつたりし  
て太郎冠者がねむらぬように努力しま  
すが、太郎冠者はノビてしまいます。  
やがて起き上つた彼れは人間ではない  
鬼になつていました。「脱殺」と同形  
異曲の鬼ものですが居眠りを主題に面  
白く狂言化した作者の作意には感服の  
外ありません。  
伯 陽(はくよう)  
京の河原の涼みも漸く近づき伯陽が  
琵琶を借りに來ました、一足違いに同  
じ琵琶を借りに來た勾当とせりあい、  
亭主の計いで兩人歌で勝負をすること  
になり、勾当は「庭中に、はかけの足  
駄ぬぎすてて、はくようなくば谷へほ  
うかせ」振まいの座敷へ人の寄せざ  
れば、犬勾当は門にたたずむ」と、こ  
れでは勝負にならぬと今度は相撲にな  
り、盲目の悲しさ兩人して亭主の手と  
り足とり倒してしまいます。

七、八月の予告

七月一日 蘆調会

能 菊 慈 童  
狂 伯 陽 井上 祐一 佐藤 秀雄  
佐藤 友彦

大衆普及能  
文化講堂に進出公演

普及と銘打つて名古屋在住五流の仕手  
方並にワキ方 唯子方、狂言方、総出  
演に東西の名手の応援を加へ華々しく  
展開致します。  
八月二十五日午後三時始

- 能 (宝) 鶴 亀 内藤 泰二  
能 (宝) 観 井上 祐一  
能 (宝) 胡 蝶 山本 博之  
能 (宝) 西 王 母 加藤 良久  
能 (宝) 鶴 段 辰 己 孝  
能 (宝) 實 盛 宝 生 九郎  
能 (金剛) 隅 田 川 豊 島 弥 左 衛 門  
能 (金剛) 山 姥 桜 間 竜 馬  
能 (金剛) 松 風 大塚 一二  
狂言 棒 志 ば り 和泉 保之  
能 (喜多) 舟 弁 慶 井上 松次郎  
能 (観) 夜 討 曾 我 久田 秀雄  
柴田 収武  
主 催 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部  
後 援 朝 日 新 聞 社  
大 藤 内 井上 礼之助  
佐藤 卯三郎

七月七日 調友会

- 能 翁 橋 岡 久 馬  
能 高 砂 内 藤 泰 二  
能 鮎 山 田 仁 三 郎  
能 胡 蝶 山 田 仁 三 郎  
能 絃 上 辰 己 孝  
能 唐 船 大 槻 秀 夫  
素 囃 子  
能 船 弁 慶 観 世 武 雄 高 安 滋 郎  
能 小 袖 曾 我 井 上 松 次 郎  
能 船 弁 慶 佐 藤 秀 雄  
至 二 九 十 八 佐 藤 卯 三 郎 河 村 丘 造

京都の旧跡をめぐって (二)

田鍋 惣太郎

京都の東北より西北の竜安寺へと急ぐ、途中大徳寺、金閣寺を素通りして竜安寺に着く、有名な石庭は方丈の前方の庭に白砂を敷きつめ、十五個の大小の石を点在させただけのものがあるが、そこに日本人独特の感覚がある。その布石の妙に感歎を禁じ得ない、一ふくの抹茶に清涼を覚えた。

洛西の新設観光道路をドライブお室、広沢の池、大覚寺、釈迦堂、野宮、天竜寺、とすぎ嵐山の渡月橋を渡り最終予定の苔寺(西芳寺)に着く、竜安寺の石庭とともに近ごろの観光ブームのつたものであるが潭北亭、湘南亭などの茶室があり、之にふさわしい苔の美しさを満喫させてくれた。

五時半京都駅に着く、一同和気あいあいと好き一日を楽しみました。京都にはほんとうに気のおちつくところ、ながい歴史がひめられた京都、時にふれ折にふれて名所旧跡を巡りたいと思っております。



狂言春秋 野村広二

能楽殿のすぐ西側、勾配になつたところに桜並木が少しあります。その下の方にしやくやくが植えられ、今年は蕾をつけましたが、花を咲かせて来会者の目をよるこぼせることでしょう。さかのぼって、十三日「花のとう」の頃、名古屋能楽倶楽部が、回を重ねて十回目の演能をおこないましたが、なかなか盛会でした。また十日から二十五日までは、見事なぼたんが散つて緑の徳川美術館に、能狂言展覧会が、世阿弥が生れてからの六〇〇年も記念して開かれる。能面、主として女面ですが、それに狂言面に、唐織が一つの中心になつております。出品のなかに「客来」(きやくらい)と銘の、打てば客きたるの意でしょうか。義直公伝来の小鼓とそれをさめる箱に目がとまりました。鼓の胴は、「三つ巴」の紋章に大根が大胆にほられ興をそそりましたが、箱がまた目をひきつけます。「翁」一式です。箱の四面とふたとで、それをみせる趣向です。翁、千才、三番叟がまい、面箱もおれば、囃子方と地(ぢ)と後見もふたにみえます。役者のまなざしとほんのり朱にいろどられた口の阿伝(あうん)が印象的です。それと二十二日は豊橋の能野神社(魚町)え、関西と東京から能、狂言面の見学にこられました。今年のはじめ金沢で能の展覧会がおこなわれていますが、それにもでかけられた。能の世界を演能だけではない

に、いろいろの分野から、要するに全体からつかむことは、なかなか大事なことだともいえます。

演能でも、狂言や能は、部分がよくても、それで狂言がよかつた、能がよつたつたとはいえません。全体のできて論じなくてはならないとおもいます。全体がよくなくては問題になりませんが、みせどころ、きかせどころだけよくても、全体がよくなくては、まともでないければ、よくできたとはいえません。全体と部分とはむつかしいつながりがありますが、いろいろの条件、状態の総和のなかで、シテが、全篇の演出をおこない、そして流動と変化のうちに、一瞬一瞬を充実させていくこととなります。そこにながれという問題もでてくるでしょうし、全体をしつかりつかんでいくかどうか、「位」などということもいわれてくることとなります。「位」とは先にあり、また後にあるものです。

悲事一つ。古典芸能とゆかり深い奈良に隠せいられた金春八条氏(家元信高氏の祖父)がなくなられた。五月十七日のことです。去る三月の中日五流能のとき、信高氏から別にお交りないとうかがつていた。八条氏は家元名を光太郎といいました。忽然と奈良の空から巨星がおち、杉の古木が音もなくたおれたかんじでした。おいしい人をなくしました。もう関寺も、卒都婆も、景清も、張良も思い出話となりました。八条氏「能としての能

の姿を身につけたわづかな役者の一人でした。兼資とも、初代金剛殿ともちがつた尊重すべき芸風で、すさまじい表現力でもつて、能をおもしろく、楽しくみせてくれました。今や古格の能は幽冥の境に消え去つてしまつたのです。

本では、関西の能楽愛好家で研究、執筆に著名な香西精氏の「世阿弥新考」が出版され、識者の称賛を博しております。

さて、能楽殿えこられる方は、ちよつと前かがみで、めがねをかけ、いつもにこにこ顔の元気な老人にあられることでしょう。作り物のおじさんで、熱田さんに能楽殿ができてからずつと、作り物は、この人の手になつていくわけですが、小型作り物を一揃えそろえて能楽殿え飾りたいとの念願から、ワキの西村弘敬氏の口添えもあり、もう随分と数をため、よい機会に陳列するようになるそうです。すでに東京ではみとめられ、朝日で紹介され、京都でも反響がおきて「金剛」夏季号に紹介されている近來の佳話です。

六月には「朝日狂言会」に「猿蟹」や「千鳥」「茶子味梅」(さすあんばい)が上演、それに鉄之丞氏の「芭蕉」が。八月には、愛文講堂で大衆能。来日のコメデイ、フランセーズが能見物にアンコールをして「熊坂」をまわせたとか。名古屋もこの折を利用して、できるだけ狂言や能のPRをいいたしましょう。

茶子味梅について一考

佐藤 生

「さすあんばい」か「ちやさんばい」か今度朝日狂言会に出た茶子味梅について「さすあんばい」か「ちやさんばい」かと云う事で又諸説紛々、「ちやさんばい」説をとられる方々は茶子味梅は成程字句通り読めば「さすあんばい」であるが音便で語がつまれば「ささんばい」になる之を日本説にすれば「ちやさんばい」つめれば「ちやさんばい」となる。語法から云つても「ちやさんばい」の方が唐音らしいからそうなのではないかとの意見である。又、唐人の名乗り「きさんばい」と云う者で御座る」と云うから「さすあんばい」音便で「ささんばい」と云つたのだろう。そうすれば茶子味梅も「ちやさんばい」が正当だとの意見である。

私はしかし本文には明かに「さすあんばい」「さすあんばい」とあるから曲名は之からとつたとすれば「さすあんばい」が正しいのではないかと思つて扱古文書を検討してみた。短時日であつたし思う様に調査が出来ぬので唯然たる証拠文献は出なかつた。大体私共も現実舞台をみて居ないし文書も番組も仮名を振つたものは少なく活字本でもほとんど題名のみ、第一和泉流だけの曲の事なので先ず古文書からと調査に掛つた。

一、和泉流家元秘書型本十冊目

混言集の内茶子塩梅と見出しあり、(本文抜萃)

……その上また面白い事を云ト云へ何と云そへ「さすあんばい」と云ト云へ「さすあんばい」シアンズル是は茶が呑度と云事じやへ又「さすあんばい」共申ト云へ夫は酒が呑度という事ぢや……へうへこちの人ござるかシテ一セイニテ楽屋ヨリ、一ノ松ニテ一セイへ抑是は唐土の東かつの西、日本の地に住者なり、唐音、日本人無心ヲ云泣……とあり変態仮名で「さすあんばい」「さすあんばい」とあり名乗りでは「ささんばい」とは名乗らない。

二、波型本、本文抜萃

へまだござりまするへ何ぢや「茶子味梅」と申しまする「夫は茶をのまうという事じや女「酒子味梅」とも申しまする……」シテ一セイへ抑これは大明国のキサンバイといへるものなり……とこれは名乗りがあるが、而シ但シ書ニ

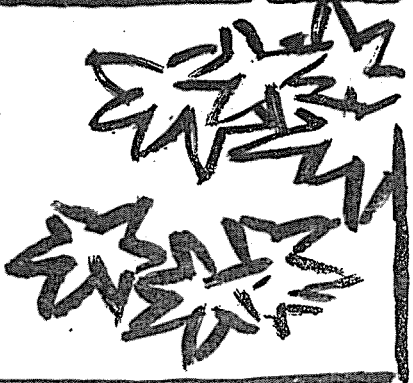
初め女の言葉に大明国の者の事を云ふので後にシテは一セイの謡出しに日本の言葉は云はぬがよし。すぐに一セイにて日本人無心を云うがよし、酒もりの時も唐音計りにてよし、雲形本「茶子味」とあり「梅」の字を落したかと思われ。本文は矢張「さすあんばい」「さすあんばい」とある一セイの文句なし

- 五、狂言三百番集狂 成と大同小異
  - 六、狂言の道野村万蔵著 茶子味梅 「ちやさんばい」と振仮名 索引にも(チ)茶子味梅とある。
  - 七、狂言研究 古川久著 茶子味梅 「ちやさんばい」と振仮名
  - 八、能と狂言 横道万里雄著茶子味梅之をもつて見るに当代の学者専門家諸賢は茶さんばいと一定されたものとみられる。題名だけ「ちやさんばい」としたのか内容の文句も「ちやさんばい」「ささんばい」としたのかそれによつていろいろの意見も出ると思われる。とにかく確然たる証拠文献も演劇もないので何とも決定出来ぬ結果となつたがもう一度再調査をつづけて何かはつきりした根拠をみつけないものと思ふ。
- 近々に徳川美術館の文献を調査する予定であります。

研究

和泉流狂言装束附考 ①

和泉流の狂言装束附及作り物について文献を検討して確固たる規準にしたといと考えている内昔の型附本についての装束附が交つて居るものもあり、又種々参考とすべきものがあるように思えましたので列記して研空の資料となればと発表することに致します。


  
 司茶子味  
 舖茶味茶  
 中巴和泉町一  
 (23) 五七六九

次之を掲載して行く方針です。資料は和泉流山脇家仕型附秘書十冊で、

一、神事、百姓、脇狂言、以下舞事、大名、坊主、仕舞、老人、女事、乙狂言、鬼事、太郎冠者空事、同盗人事、盗人、山伏、混雑と一応の分類され各冊二十五番揃の型附本によつて装束附及作り物入用物を書出し、之による注意も併記する予定で

一、神事百姓脇狂言 第一冊

1、恵比寿昆沙門 四拍子入シテ。ハナシ髪、ハサラ、梨打、調子掛、

恵比寿面、萌黄水衣、肩取、箔、腰帶、括袴中啓サス、右ニ竿、左ニ鯛ヲ抱ク

一ノアド。ハナシ髪、ハサラ唐冠、金鉢巻、昆沙門の面、ソバツギ、厚板、半切、腰帶、中啓サス、銚ヲ持ツ

二ノアド。侍烏帽子、素袍、少刀又長上下ニテモ(入用)葛桶、二銚、竿、鯛

2、恵比寿大黒 四拍子入シテ、大黒頭巾、同面、唐織、壺折腰帶

下袴中啓サス右ニ榎左ニ袋ヲカタゲル

一ノアド、夷、昆沙門同断二ノアド、掛素袍少刀括袴入用物 葛桶ニ、

袋、榎、鯛、釣針、白打紐、七五三縄長五間シテ付ル

3、昆沙門連歌 四拍子入シテ、髪サハキ紙、ハサラ、又金ハサラニテモ

唐冠 夷昆沙門同断 アド二人とも 長上下如常

入用物 葛桶 作り物 銚

4、大黒連歌

シテ、夷大黒ノ出立同断 アド三人共 長上下如常入用物葛桶 太郎 狂言上下如常

5、福ノ神

シテ、大黒頭巾 福神面 着付箔 箔壺折腰帶中啓下袴 アド二人共長上下如常 入用物 葛桶

6、瓢ノ神 シテサハキ髪鬘斗目カ着流シ腰帶扇持

一ノアド 僧出立如常 立衆十徳上下 掛素袍モギドウモア

末社 如常 水衣、フクベヲ持 入用物、水衣、鐘、フクベ同、扱、タスキ茶釜

同青竹人数白赤ノ打紐二筋

お披きのお知らせ 楽師協議会

鬼頭 五朗氏 翁シテ披キ 吉田 定男氏 道成寺大鼓披 西尾社中

河村 総一郎氏 石橋 別府 重治氏 囃子小鼓披 福井社中

藤井 勘次氏 栗原 三重子氏 豊田 民子氏 山本 たま子氏

鹿取 文字氏 岡田 寿子氏 水野 良子氏 伊藤 和代氏

松本 和寿子氏 長谷川 淳子氏 佐々木 孝子氏 河村 道昭氏

井上 良信氏 河村 道昭氏 片岡 八子氏 囃子シテ 春星会

舞見御中

一 河村 鉦二会

石井 孫太郎会

観 ころう会

藤門 加藤 良久会

長生 鬼頭 八郎会

調友 友八郎会

竜吟 藤田 六郎兵衛会

霞 田鍋 惣太郎会

潤水 林 甲子会

観水 野崎 太郎会

観正 久田 秀雄会

高安 高安 滋郎会

たなびき会 田鍋 惣一郎会

名古屋能楽鑑賞会 田鍋 惣太郎会

風韻 殿島 修二会

幸友 福井 啓次郎会

金剛流松風社 片野 東四郎会

掬水 柴田 初太郎会

曲水 増田 一雄会

掬水青陽会

金竜 金 森 準三会

春鶯 山田 仁三郎会

春星 片岡 道子会

正楽 加藤 丈太郎会

松謡 佐藤 太俊会

清風 大塚 一 二 社

名古屋支部 協楽会 支部長 田鍋惣太郎

名古屋能楽俱樂部 狂言 共同社 (イロハ順)





昭和37年9月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区英門前町6/2  
 井上重兵衛方 電話1430  
 名古屋狂言共闘社  
 印刷所  
 株式会社 地上社 電話1196

狂言人語

歌村彦四郎

「秋立ちてそごろに淋し野分かな」  
 台風十四号も案ずる程の被害もなかつたもの、次々と来る台風の訪問は秋のおとづれより早く心を痛ませます。

しかし八月の大衆能も終つて又シーズンに入つた名古屋の演能会は九月九日梅猶会を皮切りに竜吟会、巽会、松謡会……と活発に続いて行きます、素晴らしい演能が見られる喜びをもつてシーズンを迎え、皆様と御一緒に此の喜びを分かちたいと考えております。

○和泉会第二回公演  
 御待望の和泉会も第二回公演を十一月十一日に催します。番組は別記の通りです必ず御期待に副えるものと自負しております。精々御参加の程をお待ち致しております。

九月の催能

- 九月九日 梅猶会  
 卒都婆小町梅若猶義 西村 弘敬  
 能 融 梅若万三郎 高安 滋郎  
 井上松次郎  
 野村又三郎 河村 丘造  
 佐藤卯三郎  
 九月十六日 観世素謡会  
 九月二十三日 竜吟会  
 九月三十日 巽会  
 葵上 風岡 勇二  
 井上松次郎

狂言の解説

歌村彦四郎

呂蓮

何にでもすぐ氣を動かす男。僧を我家に泊めて種々話す内に出家の志をおこし女房の許しもなく剃髪して坊主になる。泊めた坊主が無学で名前をつけるに「苦勞、いろは四十八字を蓮の字につけてやつとつけた処へ女房の御出まし。お客の坊さんは一人の簪が二人居る。よく見ると一人は自分の亭主とは。何故坊主になつたとせめられて困つた男は旅の出家のせいにする恐つた女房「毛を生やせ」と地だんだをふむが……。

狂言春秋

野村広二

八月二十六日早朝やつてきた台風が去る頃、新聞が配達された。待ちかねるようひろげる、そして何気なく読者欄(朝日)をみて、いままでのいらだたしい氣持が一度に吹きとんだ。「あげます」の見出しで三四行「子ネコ三匹、しつけずみです。白地にトラ毛がところどころ云々」この簡単な文章に笑いがこみあげてきた。ただ今ようやく咲きだした紅と白のサルスベリの花は一つも残っていない始末。この間はじめていつた虹ヶ丘団地小公園の杏竹

桃の目も鮮かな木立に目に浮んできたときだつた。その前日は「大衆普及能」。盛会でよかつた。この名称は余り感心しないが、使命は実に大きい。能・狂言愛好者をふやすことはむつかしい、それかといつて、自分達の手でやらなければ誰がやるだろうか。いろいろの条件のほかに、今度のように、謡をはじめて人々に謡曲と能のちがいを知ってもらうにはうつつつけの「鶴亀」や、「井筒」とはちがつた幽玄味深い「松風」に、「曾我物」を出したことは大賛成、理解のむつかしい能の場所の変化も「松風」でわかたせてもらえたであらうし、能や狂言のめざ

名古屋市民芸術祭参加

名古屋市民芸術祭参加

十一月十一日(日)午後一時  
 於 熱田神宮 能楽殿  
 狂言組

- |     |       |       |
|-----|-------|-------|
| 文相撰 | 井上礼之助 | 井上祐一  |
| 川上  | 和泉 保之 | 井上松次郎 |
| 木六駄 | 野村 万蔵 | 野村又三郎 |
| 小舞  | 名取川   | 野村又三郎 |
| 泣   | 鉄輪    | 野村万之丞 |
| 菅ノ型 | 菅ノ型   | 井上松次郎 |
|     |       | 佐藤卯三郎 |
|     |       | 佐藤 秀雄 |
|     |       | 佐藤 友彦 |
|     |       | 井上 祐一 |
|     |       | 井上 義次 |
|     |       | 山本光次郎 |
|     |       | 井上礼之助 |
|     |       | 石田 喜樹 |
|     |       | 伊藤 宏文 |
|     |       | 井上 斌資 |

す「美しさと笑い」も、端正なカタチ、簡素、色彩、はげしさ、ずばりともいう明るさから、感得してもらえたであろう。だが、一方、全体として、「名古屋の味」をたづねると、味得するまでには、時日をかけねばなるまい。シテのことは別記したが、地謡もハヤシも、後見も、修練の不足を何とか解決したらよいであろうか。また金剛流の能に観世流から後見がたのはなぜであろう。狂言で和泉保之が名古屋勢といつしよに「棒しばり」で太郎冠者を演じたのも、ちよつとふにおちなかつた。地謡の東西の先生方の出演とはちがうようだし、これがまた一番おもしろく、安心してみられたので。狂言では「鶴亀」の井上祐一と「夜討曾我」の「大藤内」(おおとうない)もよかつた。さて、「はい、名古屋で能ができます。狂言は勿論。」こういういされる日を待ちのぞむのは少数の人だけではあるまい。立派な演能も結構、しかも地元の人たちで演能が一応できることは、夢想であらうか。名古屋にいて名古屋を問題にしない人もいるが、大いに名古屋を愛していただきたい。それには、台風がきて、われらが庭の花を全部吹きおとすこともある。他家の庭の花がこいしくなることもあろう、自分の家の梅を忘れてきまよいあるく故事もある位。かえつて他の分野の人がはげましくきてくれることもあろう、この道はけわしく、くるしいのです。

六月から八月にかけてもいろいろのことがありました。本では狂言の貴重な「わらんべ草」が岩波文庫で、狂言や能のことがでてくる本に、「日本語の年輪」(大野晋)「日本語の生理と心理」(金田一春彦) 図書(七月号、湯川秀樹)に狂言記のことが、また「喜多六平太」(長田午狂編)の大著も、それに前田青邦の「関寺小町」の絵の話が八月六日の岐阜日々に載りました。

テレビでは六平太翁のハヤシ「清経」と、金春流の「道成寺」が光つていた(ともにNHK)。最後に大阪のことである。労演が八月例会に「狂言鑑賞の会」をひらいたが、六日から十二日まで十一日間を三種類の五番立で、三回の観客をあつめる大企画を実現。今回は二度目だが、弥五郎翁に万歳はじめ大家、青年グループ出演。たとえば十日から十二日までは「萩大名、樋の酒、悪太郎、花子、菌(くさびら)」。『樋の酒』は和泉、「花子」は大藏といった風であるが、名古屋でもこういう企画を真剣に考えている愛好者もある由。秋を迎えまたうんと眼福の機をつかみたいものである。

狂言と邦楽

(新泉会) 三宅藤九郎

江戸時代には、狂言の、三番叟、末広がり、靉猿などが、長唄、常磐津、一中、富本に取り入れられ、殊に、三番叟は、いろいろに形を変えて使われ

ております。

寛永年間に、若衆哥舞伎が乱曲三番叟の名称で、三番叟、風流、大小の舞の三つを組合せて踊つたのが最初かと思われま。

其後、長唄に「晒三番」「種蒔三番」「雛鶴三番」「廓三番」「櫓三番」「操三番」が作られ、長唄と清元との掛合ものに「舌出し三番」が出来ました。常磐津には「式三番」「子宝三番」があり、清元には「四季三葉草」、義太夫には「寿式三番」、一中には「三番叟」、富本には「家桜三番」という様に、狂言の三番叟の邦楽への転身ぶりは多彩を極めております。

靉猿は、義太夫で「松風村雨束帯鑑」、常磐津では「花舞台霞猿」となつており、長唄、一中にも「靉猿」があります。

釣狐は、常磐津に「釣狐の対面」「廓釣狐」「釣狐廓掛罌」があり、河東、一中の掛合に「信田妻釣狐の段」、長唄には「釣狐春乱菊」などがあります。

末広がり、長唄に「末広狩」、常磐津に「寿末広」、一中に「末広」、富本に「朝比奈末広」が作られております。

この外、見物左衛門を、一中で「都見物左衛門」としており、地唄では、名取川や、狂言小謡からの七つ子もあります。以上よ、大体江戸時代に作られた物ですが、この内、長唄の「靉猿」は明

治二年、常磐津の「釣狐廓掛罌」は明治二十五年、一中の「末広」は明治十三年に作られた物です。

江戸時代の狂言物は、幕府の式楽としての能の狂言を、哥舞伎にそのまま取り込むことに遠慮があつたと見えて、その一部だけをを用いる程度でしたが、明治時代になつてからは、相当大胆に、狂言をつくりといった模倣が多くなりました。

福地桜痴の作に、義太夫と長唄で「素袍落」、常磐津で「二人袴」、長唄の「吹取」があり、河竹黙阿弥の作に、常磐津で「釣女」、竹柴其水の作に、常磐津で「三人片輪」と「墨塗」、竹柴晋吉の作では、常磐津で「武悪」があります。岡村紫紅は、常磐津と長唄で「身替座禅」、長唄で「棒縛」「太刀盗人」(太刀奪)、「鈍太郎」「茶壺」など、多くの狂言種をものにしております。木村富子も、義太夫で「弓矢太郎」や長唄での「蚊相撲」の外、書上げたまま上演された物で数曲ある様です。

最近では、三宅藤九郎監修の常磐津による「麗櫓」や、野村万蔵監修の長唄による「唐相撲」なども哥舞伎座で上演されました。

右の外、鶴沢道八作曲の義太夫「三人片輪」、初代宇治紫文作曲の一中「花子」と「靉猿」があり、明治二十六年に宇治派で「鉢たたき」を又、明治三十四年二月、東京座で「連獅子」が上演された時の間狂言、長唄で、宗論

から取材したのも出来ております。近年舞踊会などで上演された狂言物をこれ等と合算すれば相当な数に上るでしょう。

業平と居眠り

服部 幸雄

狂言「業平餅」の眼目、業平が「語り」を述べ、舞を舞い、餅をつまらせ、また娘にかからいかける間、長柄持が橋がかりのつけぎわ(狂言座)に坐りこんでコックリコックリ居眠りをしているのを御存知であろう。

現在の台本、演出では、隨身や太刀持が退場してしまつて、長柄持(ながえもち)ひとりが残つているが、古くはここで退場せず、みんなが並び座つて眠つていたのではないかと私は考えている。

いったい何故に、ここで隨身たちは眠つていなければならないのであろう。業平ともあろうものが見苦しい行ないをするのを隨身たちが見ているのでは都合がわるいからであらうか。家来たちの見ている前では、とてもこんなことを業平はしそうにないと考えたから、あえて眠らせてしまつたのだから。どうもそうではないらしい。なぜかなら、そんなに都合が悪いのなら、長柄持も一緒に退場させてしまえばいいはずだからである。いや、狂言ではたとえ舞台に出たままでも、狂言でも、そのまま場所をかえてしまふことができるのだから、少し離れた所

に待つていて見えなかつたことにする演出だつてできたはずだ。にも拘らず『業平餅』はそういう演出にしていな。従つて、長柄持は明らかに登場者として、この「業平の行為」の場に参加しているのだ。彼はコックリコックリ居眠りをしていて、という演技をしつつ、「業平の行為」にかかわつていると考えねばならない。

逆な方方をすれば、長柄持（に代表された形の家来たち）が居眠りをしてる間に、これこれのことが起つたのだということをはつきり見せようとする作爲があつたと思われるのである。そうでなければ、揚幕へ入れてしまつて、必要になつたところで呼び出せばことは足りるし、そういうのはいろいろ例もある。

業平が「語」つたり「舞」つたり、失敗したり、ふざけたりしている間、人々がそれを知らなかつたことを示す必要は何であつたのだろう。

私は、これを「業平」を神と考へ、その行為を神のわざであると考えていた中世の人々の心意が反映しているに違いないと考へている。

現在も尚、暗闇祭・忌籠・斎籠祭などといつて、真夜中に村中灯りをすつかり消し、音を発せず、忌籠つて神を迎える神事が諸地方にあつて、その名残りを止めているので知られるように、神は真夜中、人々の厳重な籠りのうちにのみ姿を現わし給うとする信仰は、極めて普遍的であつた。その精神

は、私の小学校時代、天皇陛下（現人神）の行幸を「お見送り」するとか、最敬礼をして頭をあげてはならぬと戒められていたのにまで続いてい

た。私の学校では、奉安殿にある勅語を行事のために講堂に運ぶ時、高等科の生徒二人が神宮の服装をつけ、輿をかいて持ち運んでいた。奉安殿の扉を開いて勅語を取り出し、しつしつと運んでいく。式が終れば再びしつしつと持ち帰つて納めた。全校生徒は「氣をつけ。最敬礼」の姿勢で随分長時間待たされた。私は、誰がどんな服装でかづいでいるのか、奉安殿の内部はどんな装置になつて居るのか、何とかして一度でいいから見たいものだ、先生の眼を盗んで上目づかいをしてみた

が、さすがに扉の開かれて居る時は恐ろしく、とうとう見ず知らずに済んでしまつた。下手に頭を上げようものなら、直ちに鉄拳が落ちてくるのであつた。

さて、民衆の生活の中で、斎籠りの真意が少し忘れられてくると、神様は顔が見苦しいから人に見られるのをいやがりなさるのだ、という理屈がつけられた。西宮の「宵戒」などはその例である。夷神は容姿が醜いだけでなく、髻でびつこだともいつていた。人々は遠慮して神の姿を見ないようになつていたのである。

これで、業平の行為を見ないで眠つていた長柄持の意味が判りである。業平が神であるために、その姿を

人が見ではならぬ、えていた時代が確かにあつたのだ。そして、人が眠つていたからこそ、神は自由にふるまうことができたのである。

最後に、まさしくこのことを説明するかのような神事と伝承の例を挙げておこう。

それは愛知県渥美郡田原町の久丸神社において正月申の日に行われる御神体を移す神事である。村民はこれを見てはいけないというので、戸を閉して寝てしまふことになつており、通称を「寝祭」という。伝承によると、この神社の祭神はもと公卿であつたが、姿が見苦しいから人に見せたくないといつたので、こうすることになつたといつて居る。いくらもある忌籠神事の一例にすぎないけれども、その理由として「もと公卿であつた」といつて居ることがおもしろい。猿丸などを連想したのかも知れないが、よくは判らない。しかし、公卿が神に祀られて、しかも人々に「眠り」を強制するところは、正に「業平餅」を作り上げた民衆の心意と共通している。

業平の述べる祀雨の「語」、餅づくしの「舞」にも、強い宗教的性格が感じられるが、それらについては別の機会に述べよう。

有名な紀河原での記録にみえる「餅クヒ」を、これの原型とするなら、甚だ古い作品とみてよいこの狂言に、世人の宗教的心意の反映を感じとうとすることは決して暴挙とはいへないであらう。（一九六二・六・一九）  
（三鷹高校教諭）

登録商標  
御千代宝

登録商標  
尾張名古屋は  
城で餅

登録商標  
桐壺

名古屋  
中区宝町二丁目  
龜末広

電話局  
三三〇三  
三四四六  
九二五二

研究

和泉流狂言装束附考 (2)

河村丘造編

- 7 筒竹筒  
シテ竜立ニ鳩ノ作り物白垂色白キ登籠  
厚板ハツピ半切腰帶中啓ヲ持  
アト二人共掛素袍少刀腰帶括袴竹筒ヲ  
右ニカタゲル
- 8 松脂  
入用物 杖竹ニ竹筒ヲ付ル、葛桶  
シテ黒頭、賢徳面、厚板半被肩取ル、  
腰帶、半切カ下袴、アオリを肩に  
かける  
扇持杖ハナシ但シ直面、壺折、下  
袴ニテモ  
主、立衆トモ長上下  
太郎 上下如常
- 9 田植  
入用物馬ノ障泥(アオリ) 紅打紐 葛桶  
シテ梨打、調子掛、白水衣、箱、腰帶  
括袴カ下袴、扇持、又立烏帽子常  
衣下袴ニテモ  
但黒風折寄狩衣、下袴ニテモ  
アト立衆女出立上ニカタツギ帷子ヲキル  
松葉ヲ袖ニ入レル
- 10 三人長者 四拍子入  
三人共剣先又ハ侍烏帽子掛素袍括袴  
腰帶少刀扇
- 11 筑紫奥  
二人共掛素袍、括袴、腰帶、少刀  
シテ作物右ニカタゲル  
但シ上下少刀ニテモスル
- 奏者 侍烏帽子素袍少刀扇但シ長上下  
ニテモ
- 12 入用物薬ツトラ竹ニツケル  
佐渡狐
- 13 三人共右同断ノ出立、ツトナシ  
餅酒

- 14 佐渡狐同断  
昆布柿
- 15 餅酒同断  
松弓弦葉
- 16 餅酒同断  
三人夫
- 17 百姓出立如常 奏者出立右同断  
雁歴金
- 18 シテ出立右同断ツトラ右ニカタゲル  
アト二人共右同断  
作リ物 竹ニツトヲ付ル
- 19 三人共出立右同断  
弓、矢、大小太鼓入り  
シテハ弓アトハ矢ヲ右ニカタゲル  
作リ物 弓、矢、
- 20 三人トモ出立右同断  
醉辛
- 21 二人共 狂言上下 如常  
末広 四拍子入  
シテ 侍烏帽子 素袍 少刀
- 22 太郎冠者 狂言上下 如常  
二ノアト 出立シテ同断 初より出ル  
入用物 傘  
シテ 麻生 四拍子入
- 23 藤六源六 二人共 狂言上下如常  
三ノアト シテ同断 組長上下ニテモ  
入用物  
葛桶ノ蓋ニ櫛ハサミ元結五鉢付ヲ入ル  
キヤウセン長一尺三寸計 檜丸木  
五鉢付 奉書ニテ切コヨリ付ル  
侍烏帽子ヲ竹ニハサミ 長二尺計リ  
三本柱 四拍子入り  
正面 シテ 二三  
シテ出立末広同断 太三  
アト三人共 狂言上下 如常
- 丸太三本 楯長サ五尺計リ太サ指渡五  
寸計リ  
文政十二年丑四月八日  
ナゲ 一テ五尺三寸 三寸五分

十月の予定

十月七日	松誦会	小川次枝	西村弘敬
十月十日	佐藤太後	高安滋郎	西村弘敬
十月十三日(土)	御衛会	西村弘敬	西村弘敬
十月十四日	掬水青陽会	西村弘敬	西村弘敬
十月二十一日	風韻会	野村又三郎	野村又三郎
十月二十八日	名匠御賞能	福王茂十郎	福王茂十郎
小鍛冶(黒頭)	梅屋六郎	福王茂十郎	福王茂十郎
野宮	河村丘造	高安滋郎	高安滋郎
能	佐藤秀雄	和泉保之	和泉保之
能	三宅藤九郎	井上松次郎	井上松次郎
能	伊藤睦子氏	稲葉ゆき氏	伊藤睦子氏
能	佐々木孝子氏	伊藤嘉奈子氏	伊藤嘉奈子氏
能	鈴木美竹郎氏	宇佐美竹郎氏	宇佐美竹郎氏
能	村瀬澄子氏	滝見郁子氏	滝見郁子氏
能	川島兵助氏	川島兵助氏	川島兵助氏

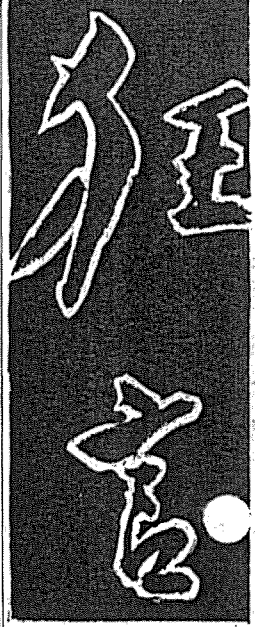
お披露のおしらせ 楽師協議会

世界をつなげ人の和で

印刷 ● 企画 ● デザイン ● 写真

## 印刷の地上社

名古屋市中区南大津通3-7  
TEL (24) 1196 / 3249



昭和37年10月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区長門前町6ノ2  
 井上重兵衛方 電話1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 株式会社 地上社 電話1196

狂言人語

歌村彦四郎

紅葉、山を染め秋冷の氣をぞろ菊の花に吹き渡る季節となりました、すがすがしい秋の氣を胸一杯にはらんで能楽殿の舞台に研を競ふ楽師諸賢の健闘を

名古屋市民芸術祭参加

名古屋和泉会第二回公演

十一月十一日(日)午後一時  
 於 熱田神宮能楽殿

狂言組

- |     |       |       |
|-----|-------|-------|
| 文相撲 | 井上礼之助 | 井上 祐一 |
| 川上  | 和泉 保之 | 井上松次郎 |
| 木六駄 | 野村 万蔵 | 野村又三郎 |
| 小舞  | 野村又三郎 | 野村又三郎 |
| 名取川 | 野村万之丞 | 野村万之丞 |
| 鯉   | 和泉 保之 | 和泉 保之 |
| 鉄輪  | 河村 丘造 | 河村 丘造 |
| 泣尼  | 佐藤 保之 | 佐藤 保之 |
| 葺   | 井上松次郎 | 井上松次郎 |
| 替ノ型 | 井上松次郎 | 井上松次郎 |

折つて此芸術の秋の成果を期待しませう。

八日には恒例の新城富永神社の奉納能が催されます、数百年の伝統を守つて敵かに能三番狂言五番が演ぜられ市民こそつての観能は誠に雅味あふれる風情であります、いつまでも「続けられるよう折つてやみません」。

十月の催能

- |        |       |                 |
|--------|-------|-----------------|
| 十月七日   | 松誦会   | 午前九時半           |
| 能      | 菊慈童   | 小川 次俊           |
| 能      | 望月    | 佐藤 太俊 高安 滋郎     |
| 能      | 清水    | 井上松次郎 井上礼之助     |
| 能      | 竹生島   | 班女、是界           |
| 能      | 末広    | 不見不聞、ぬけがら、狐塚、花折 |
| 十月十三日  | 観能会   | 午前十時            |
| 能      | 弱法師   | 浜田豊太郎 西村 弘敬     |
| 能      | 松風    | 鈴木きくえ 西村 欽也     |
| 能      | 安宅    | 青山当一 高安 滋郎      |
| 能      | 文荷    | 井上松次郎 佐藤 保之     |
| 十月十四日  | 掬水青陽会 |                 |
| 能      | 小督    | 佐藤 太俊 西村 弘敬     |
| 能      | 班女    | 柴田 収武 高安 滋郎     |
| 能      | 葵     | 上 観世 元昭 高安 滋郎   |
| 能      | 金岡    | 佐藤 保之 野村又三郎     |
| 十月二十一日 | 風韻会   |                 |
| 能      | 菊慈童   | 神戶 敏雄 西村 弘敬     |

狂言の解説

歌村彦四郎

清水野中の清水へ水を汲みに行くと云付けられた太郎冠者、鬼に出合ったと虚言を云つた計りに自分がお調子にならなければならぬ仕儀となりお調子にのつた計りに化の皮をはがれる。文荷小人狂いの主の命で恋文を持たされた太郎冠者と次郎冠者、余りの重さに文を解いてみたら、こいしや富士の山迄書き込まれた文に驚ろいて。金岡巨勢金岡と云ふ画人ふと見初めた美女に現をぬかし筆も手にとれず。女房が見かねて自分を色彩してその美女に見立ててと云ふので彩色してみたもののどだいがどだいでは何とも筆を折る以外の手はない仕儀となる仕舞狂言として重い習もの佐藤卯三郎氏の熱演を御鑑賞下さい。

狐塚 狐塚の田に鳥追いにやられた太郎冠者、狐が出るに聞かされていた為見舞に来た主と次郎冠者を狐の化けたものと早合点して縛りつけてしまふ。

武悪 狂言三主もの一つ武悪と云ふ不奉公者を討てと命ぜられた太郎冠者腕の違ひからだまして討たうとするが開き直つた武悪の殊勝な顔に振上げた刀にもぶついに落ちてやる。

ところが武悪を討つたと報告して追善の為清水へ詣りに行く二人は討つた武悪とバツタリ出合ふ、さあ大変……

狂言春秋

野村 広二

十月を迎えると、方々で「芸術の秋」のことばをきくようになる。九月は九日に、先代梅若万三郎追善能(梅猶会)が、おこなわれた。見所は満員。猶義が「卒都婆小町」、万三郎が「融・十三段之舞」をまいりました。どちらも佳品。「卒都婆」は四番目のおもしろさ、幽玄の対決、調和といった興味のある問題を考えさせる演能でした。幽玄味のかつた能でしたが、観世の「卒都婆」を一つの極点でみせていたようでした。各演者の品のよさ、曲の格調の高さは、おわつて橋掛をかけるシテのスタタもいようのない美しいものでした。「融」も万三郎の着実・重厚な味を切々とみせた代表作でした。先代万三郎の流れるような演能ぶりは六郎に、あざとさのない、てらわぬ点は万三郎に、そして先代六郎のあの瞬間にみせたほとぼしるような激情は、どうも猶義がついだようにおもわれなくなりません。おもしろいとおもいました。勿論三人の個性とか能の解釈の仕方といったことをあわせて考えなくてはならないでしょうが、この日狂言は「呂蓮」(又三郎、丘造、卯三郎)でしたが、あつさりしすぎていました。次は、九月十九日からひらかれた徳川美術館展(十月七日まで)。能・狂言関係は、豊国祭屏風と相応寺屏風の画の中のひとこまはおもしろく、オモテや装束もつば、それぞれに夢を呼びます。「紅地金柳にまり唐織」は、いつみても胸おどる色彩と図柄です。狂言は「唐人相撲」がでていました。ラデオでは西村高安両師の出演を聞きテレビでは、こども名作座「殿様のち

やわん」(野村万作)、日本の芸能に「松虫」(六郎)、「海人」(前・田中幾之助、後・英雄)、ドラマで「暗穴道」(あんけつどう)、これは面打師とシテ方の太夫との芸術精神の斗争を描いたものでした(暗穴道のいわれは平家物語の一行あじやりまたは一行の沙汰のくだりにておられます、これもNHK)。

十一月の名古屋和泉会には「泣尼」と「茸・替ノ型」が名古屋勢でです。保之の「川上」万蔵の「木六駄」とともに期待がよせられる演し物です。

【研究】和泉流狂言装策付考(3)

河村 丘 造編

24 張章魚 四拍子入り

三人共 末広同断

入用物 平太鼓 撓

25 目近

シテ 出立 末広同断

アト 二人共 狂言上下

入用物 扇二本骨ニ紙ヲハサム米骨ノ作

第二 鴛類及雑

1 松拍子 四拍子入り

シテ 侍鳥帽子崩黄ノ掛直垂又は掛素

アト ニテモ 後ヲハネル

アト 二人共 長上下 如常

2 煎物

シテ 通田頭巾笠笠ニ紅ノ切ヲ付ル

七徳カ羽織 帶ナシ 腰帶 袴

作り物 右ニカタゲル

一ノアト下 厚板カ箱 下袴上のしめ

侍鳥帽子素袍少刀扇但シ長上下

ニテモ

立案 右同断

太郎冠者 狂言上下 如常

入用物 水衣 梨打 調子掛 タスギ

葛帯カ赤打紐 鞆鼓 撓 塵取

羽帯

造り物 薄茶屋 ホウロクニツ 一ツ

は布ヲ付ル洪団扇ナヘトリ茶釜

茶碗ニツ柄杓 杉葉管笠紅水引

付

柄杓ト団扇ヲ竹ニサス ナヘト

リヲ竹ニカケル

3 鍋八撓

シテ 狂言上下括ルホウロクヲ右ニ提

テ持ツ

アト 右同断、角棒ニカツコヲ付ケテ

右ニカタゲル

一ノアト 長上下如常

入用物 白布七尺計リホウロクヲ巻

鞆鼓 松葉本ヲ包ムニツ

チリトリ 羽帯

「鞆鼓声高衆衆停」 東披の詩

「半升鍋内煮山川」 品洞賓の詩

4 牛馬

二人共狂言上括ル

シテ 左ニ牛ヲ引 二人共打杖ヲ右

アト 右ニ馬ヲ引 ノ後ニ指ス

目代 長上下 如常

入用物 馬 杖竹ニ白垂ヲホウジニテ

括ル

牛 杖竹ニ黒垂ヲホウジニテ

括ル

5 連雀

シテ 羽織上帯腰帶括袴箱ヲ魚ヲ

アト 女出立如常 葛桶ヲ持カツキ帷

子ヲキル

アト 長上下如常

入用物 カツラ帯カ白打紐カ

作り物 笠ヲ波紙ニテ包白布ニテ連尺

ヲカケル布ニ文計リ寸法三尺ニ

尺五寸計

十一月の予告

十一月三日 九草会 午前十時

香子 望月 浅野 常蔵

井上松次郎

十一月四日 九草会 午前十時

菊慈童 伊藤 祐彦

吉田 祐彦

井上 祐彦

天竺桂とも

植村真太郎

佐藤 秀雄

観世 喜之

歌村 彦四郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎

井上 松次郎



花 甚

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL 4587  
 名古屋駅表玄関 TEL 9078  
 温室 千種区猪高町西一社 TLE (猪高)25

東新町電停東 CBC放送局西隣  
 TEL 24 0487・5296

# 狂言

昭和37年11月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町5ノ2  
 井上軍兵衛方 電話1430  
 名古屋狂言共闘社  
 印刷所  
 株式会社 地上社 電話1196

## 狂言人語

歌村彦四郎

いよいよ秋もたけなわになりました。まず十一月十一日の第二回名古屋和泉会は、ぜひとも御鑑賞願ひ度いとお願ひ致します。

第八回新橋新泉会（三宅藤九郎氏主宰）は去る十月十六日東京観世会館にて小舞数番、舞狂言「蟬」と「田植」が上演されました。勿論地謡もお囃子も全部新橋の名妓連中でありました。先生藤九郎氏の実力が実つたものでしょう。

第十七回芸術祭主催「芸術祭狂言の会」は十一月十三、十四、十五の三日間東京で開かれます。東西の芸達者が動員されます。

秋も深まるにつれて催能も各地で盛んに催され、当地に於ても別項掲載の通りであります。見られる方も並大ていではありません、心臓を強くして御鑑賞をお願いいたします。

## 十一月の催能

十一月三日 九阜会 午前十時  
 狂言 望月 浅野 常蔵  
 間 井上松次郎

十一月四日 九阜会 午前十時

能 菊慈童 伊藤 祐茲 西村 弘敬  
 能 卷絹 吉田 妙 高安 滋郎

能 松風 天竺柱ともゑ 西村弘敬  
 能 芦刈 植村真太郎 西村 欽也

能 鷺 観世 喜之 高安 滋郎  
 間 歌村彦四郎

狂言 柿山伏 佐藤卯三郎 河村 丘造  
 狂言 釣針 井上松次郎 井上礼之助

能 海士 武田太加志 西村 欽也  
 間 佐藤 秀雄

十一月十一日 和泉会 午後一時  
 十一月十八日 観世会

能 遊行柳 梅若 六郎 西村 弘敬  
 間 井上礼之助

能 小鍛治 藤井 久雄 高安 滋郎  
 間 井上 祐一

狂言 犬山伏 佐藤卯三郎 井上松次郎  
 間 河村 丘造 佐藤 秀雄

十一月二十三日 観世別会  
 能 郎 観世 元正 高安 滋郎  
 間 佐藤 秀雄

## 名古屋市民芸術祭参加 名古屋和泉会第二回公演

十一月十一日(日)午後一時  
 於 熱田神宮能楽殿

### 狂言組

文相撲 井上礼之助 井上 祐一  
 川上 和泉 保之 井上松次郎

木六駄 野村 万蔵 野村又三郎  
 野村万之丞 歌村彦四郎

小舞 名取川 野村又三郎  
 野村万之丞 野村彦四郎

泣 尼 河村 丘造 佐藤 秀雄  
 佐藤卯三郎

素囃子 金森 準三 田鍋 惣太郎  
 吉田 定男 鬼頭 八郎

葺ノ型 井上松次郎 井上 祐一  
 井上 友彦 佐藤 秀雄

井上 義次 井上 義次  
 井上 義次 井上 義次

井上 義次 井上 義次  
 井上 義次 井上 義次

井上 義次 井上 義次  
 井上 義次 井上 義次

井上 義次 井上 義次  
 井上 義次 井上 義次

井上 義次 井上 義次  
 井上 義次 井上 義次

十一月二十五日 掬水会

能 羽衣 中西 正江  
 能 清経 北村 勇夫

狂言 鬼瓦 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄  
 十一月二十五日 童泉会(岡崎) 午前九時

能 二人静 伊藤 正敏 西村 弘敬  
 能 小鍛治 高比良澄太 和泉 太郎

能 土蜘蛛 杉浦 芳枝 和泉 太郎  
 狂言 梶山伏 野村又三郎 山本光次郎

田沢 義弘

## 狂言の解説

歌村彦四郎

柿山伏(かきやまぶし)

大塚葛城の修業をすませ、帰山の途中喉のかわくままに、路ばたの柿の木にのぼり柿をたべはじめました。運わるく柿主が見廻りに来て、いろいろのものに見立てて山伏をなぶります。果ては鷲だと云い鷲なら飛びさうなものはやされて、止むを得ず飛んだところ腰の骨を折つてしまいました。

釣針(つりばり)

西の宮のえびす様に妻を授かるようにと、太郎冠者を供につれて出かけます。参籠して夢のお告げに西門に釣針があるからそれでつれとのこと、早速その釣針で太郎冠者に釣らせませす「釣るよ〜奥様を釣るよ」と調子に乗つてつりますと女が掛りました。ついで腰元も大勢つりまして、自分の妻を定めようとして顔を見てびつくり仰天逃げ入ります。

犬山伏(いぬやまぶし)

旅僧と山伏が茶屋で出会い、例の情強もの山伏の難題に、茶屋の亭主の計いで勝負をすることになり、茶屋の飼う犬を連れ来て馴ついた方が勝ちと定めました、結局は強慢な山伏が犬に追われて逃げ去ります。

止動方角(しどうほうかく)

気短かな主人が茶藪へがあるので、太郎冠者を呼出して、茶壺、太刀、馬などを伯父のところ借りにやりました。いろいろと云ひつくりつてやつとこれだけのものを借受け自身馬を曳いて帰つて来ました。遅いと云ふので迎えに来た主人は、口汚く罵るので我慢ならず、太郎冠者が教えられたしはぶきをして主人を落します。これを繰返すうちとうとう主人を馬にして太郎冠者が乗ります。

鬼瓦(おにがわら)

遠国の大名が訴証のため都に滞在しておりましたが、目出度帰郷することになったのでお礼お暇乞いに葉師堂へ参詣に参りました。フト破風の鬼瓦を見つめてさめんと落涙いたします。国元に残して来た女房の顔を思い出したのです。人間の真の愛情を表現した皮肉な短篇であります。

狂言 春秋

野村 広二

十一月は和泉会の狂言と、能では「驚」(喜之)、「遊行柳」(六郎)、「

「道成寺」(山本勝一)がある。十月下旬 院展に行った。新井勝利氏の「伊勢物語」に期待をかけ、片岡球子さんの「海」がどんな画かみたかった。今年は「たわいない夢を見つづけるおぼこ娘云々」といわれていたので、舞楽「陵王と納曾利」(りようおうとなそり)を「幻想」風に扱った昨年に対し、すつかりあたらしい画想かなとおもつて、その前に立つたところ、それは、「大原御幸」で、シテの二位ノ局が物語る、幼い天子が海に入り給うあたりが画にしてあつた。京人形風の二人にさかまく波、これが印象的、速くに平家の赤旗をなびかせ、さびしげな大船のすがた。これはたわいない夢以上に、昨年同様、最高の幻想、最大の悲事を物語る平家物語の一コマであつた。能は十月の名匠鑑賞能のあと、喜之氏が「驚」をまう。「還暦を迎えるまで老女はつとめません」が口ぐせの喜之氏は、還暦を迎えて十三日、矢来の本城で「鸚鵡小町」を演じ、おもしろかつたとの評判のあと、名古屋の「驚」である。能は、一度とび立ち、勅諭とよばれ、まいおりて天子の前につれてこられた驚に五位の位が授けられる。そのところの文章からすると、驚だけに賜つたのか、そのようにもうけとれる一方、どうも活躍した蔵人(くろうど)にもおなじく五位の位が与えられたようにもおもわれる。実はこの蔵人のことである。中学の園語で「目をかけていただいたI先生

山本博之来名廿五周年

観衛会記念別会能

十一月廿三日 午前十時開始  
於 熱田神宮能楽殿

能組

河村和重

観世元正

高安滋郎

寛 鉦一 観世元信  
田鍋 惣二郎 野口 伝之輔

山本博之

梅若 六郎

西村 弘敬

亀井 忠雄 藤田六郎兵衛  
福井 啓次郎

替之型

山本勝一

高安滋郎

亀井 俊雄 観世元信  
田鍋 惣太郎 野口 伝之輔

道成寺

他ニ仕舞 狂言

主催 名古屋山本観衛会

後援 名古屋観世会

名古屋梅若会

朝日新聞社

事務所 名古屋南区観音町八ノ六六

山田達方 電話〇二二四一

から六位の蔵人は昇殿、清涼殿の南面の殿上の間に昇ることが許されるが、五位になると昇殿ができなくなる。かえつてこれをなげくのですとおそわつた。そのあとがあつたとおもうが忘れてしまつたらしい。とワキの蔵人

は昇殿はできなくなるわけ。春にこの曲と六位の蔵人のことを名大の国文学M教授にお話ししたところ、そうです、そしてたいい地方官にでるようですとのことであつた。そこにはまた蔵人のあたらしい生活がまつているこ



とであろう。次はラジオで「狂言師」(平岩弓枝)をきく。親子二代の狂言師と小鼓の名人とが「石橋」の問狂言に早鼓をいれる、いれられないというお互の家伝をはさんで、技芸によせる自負、人間味が一時のドラマでもおもしろく表現された。狂言は「鳴子」(三宅藤九郎、右近、保之)、狂言謡をたつぷりきかせてくれたし、「ほーほー」のかけ声も秋の田園風景をうかばせていた。(NHK)

学校巡演狂言鑑賞会

名古屋学生狂言鑑賞会

狂言は、能と共に六百年の伝統を持つ、世界文化が珍重すべき国民芸術の一つであります。能楽以前の芸能である猿楽の滑稽をとり入れた狂言は、日本最初の純粋なセリフ劇として構成されたもので、能の貴族性に比べて、庶民的性格を持ち、対話を主にしており、ますので、予備知識無しにも容易く面白さを味う事が出来、青少年にも親しみ易いものであります。

一体、滑稽文学とか喜劇とかいいますと、兎角卑俗に陥りたがるものですが、狂言は日本中世の演劇として制約の多い条件の下に成長し、成熟したものですから、今に当時の姿を正しく伝えているのであります。

近年、国語の教科書に、狂言の台詞や評論が屢々載せられておりますのも、よし理由は他に種々あるにして

も、の文芸史的的地位を高く評価し、我が国に発達した劇文学の代表として選んだものと考えられるのであります。従つて、これを学ぶ学生諸君の間にも、漸く狂言に対する関心が抬頭しつつありますが、元来舞台芸術として作られたものなので、単に文詞だけでその全貌を知る事は誠に困難なのであります。

生きた教材——を生徒に示す此の鑑賞会(P.T.Aの方々の同時参観も歓迎)の開催を切にお勧め申し上げます。詳細は共同社へお問合せ下さい。

十二月の予告

- 十二月一日 一謡会
- 能 田村 後 河村 鉦二
  - 能 鶴 銅 八田常次郎
  - 能 福ノ神 佐藤 秀雄
  - 十二月二日 乱 能
  - 十二月九日 宝生会 午後一時
  - 能 鳥 追 野口 緑久
  - 能 乱 井上松次郎
  - 能 雁 磔 河村 丘造 井上礼之助
  - 十二月九日 竜神会 岡崎随念寺
  - 能 鉢ノ木 竹内 六郎 高安 滋郎
  - 能 狸 栗 梨本 秀治 高安 滋郎
  - 十二月十六日 婦人師範連合会

世阿弥 乱 祭 能

十二月二日 午後一時 於 熱田 能楽殿

- 能 小 鍛 治 寛 三男 福井啓次郎 野崎太郎 大河村一鉦二 加藤丈太郎
- 能 小 胡 蝶 後藤孝一郎 片有 岡賀滋子 立高安村 西尾孫太郎 井上礼之助 山口欽也 高安 滋郎
- 能 通 円 西村弘敬 高西尾 井上礼之助 西村弘敬
- 能 小 督 加藤良久 鬼頭八郎 柴田初太郎 久田秀雄
- 能 文 荷 佐藤太俊 西丹 田鍋惣一郎 田鍋惣一郎 西尾孫太郎 柴田初太郎 久田秀雄
- 能 安 宅 井上松次郎 鬼内 井上礼之助 井上礼之助 塚本秀雄
- 能 塚 田鍋惣一郎 河村総一郎 吉田定男 辰和 泉保孝 殿高橋 静二夫
- 能 黒 塚 田鍋惣一郎 河村総一郎 吉田定男 辰和 泉保孝 殿高橋 静二夫
- 能 後見 福井啓次郎 藤田六郎兵衛 地謡 池田 寛助 川田 欽一 夫 鬼頭 喜太郎 三男

△お申込所各楽師方  
△当日招待券御持参願います

主催 能楽協会名古屋支部 (終了五時半頃)

昭和卅八年一月の予告

一月六日 名古屋学生能楽連盟  
一月十三日 春星会

能 芦刈 金剛 巖  
舟弁慶 片岡 道子  
佐藤卯三郎

餅 酒 河村 丘造 井上礼之助  
佐藤 秀雄

一月十五日 大槻十三師進善能  
能 仲光 觀世 元昭 高安 滋郎  
梅若 六郎

能 羽衣 觀世 元正 高安 滋郎  
觀世 武雄

能 砧 大槻 秀夫 西村 弘敬  
井上松次郎

能 石橋 大槻 文藏 西村 欽也  
觀世 喜之

能 六地藏 野村又三郎 井上松次郎  
河村 丘造 佐藤 秀雄

私のペット

(CBCクラブ通信提供)  
酒 盃

高安 滋郎  
(高安流十三世宗家)

「私は酒を飲む」というと酒豪といわれる諸先輩に、あれは酒を飲むという内に入らぬと、お叱りを受けるかもしれぬから、「酒を嗜む」という程度にしましょう。酒の効用は今更申し上げるまでもなく、古くは白楽天などが色々と詩に作り、歌に詠みしておりましたから、ここで申し上げることは差控えます。しかし酒は飲むときの道具などによつて、また興趣も異なると思っています。蓋にしても、その折々の肴により、また場所により、色々と蓋を変え、また場所により、色々と蓋を変えます。

私はコレクションというほどではありませんが、これは一寸面白いとか、形が変つていたりとか、いろいろの面白い集めたくないので、さうさう他処様の物を慾しがるわけにも行かず残念なときもあります。料亭、おでん屋、旅館などで気に入ったのがあると姐さん方に少々包んで頂戴？におよぶ場合もあり、また遂に許可が出ぬままに、そつと懐に忍ばせて失敬して来るなどして、いつの間にか相当の数になり名器ならざる迷器が箱一杯になりまして、これを晩酌に時々変えて、その時々の中々楽しいものです。今頃は先日手に入れた、河村喜太郎作の「ぐい呑み」をぐいぐいやるときに使用、またちびちびやるときは、以前金沢の旅館で手に入れた丸谷の端そりになつた、小さいので、ちびちびやっております。秋、織部、志野など、焼の交つた物、型の交つた物など、今でも色々あります。酒を呑む者の常か？ついつい調子が出て来ると飲み過ぎをやることが多いが、戦災で大分失くしました。が、焼けて出た中の銀盃で、私の恩師故金剛右京師より頂いた物に「飲みたからでこそ葉なれ今年酒」と刻りのある物があります。この盃を見る度に、本当に「飲みたからでこそ葉だ」とつくづく考えさせられます。

研究

和泉流狂言装束附考 ④

- 6、八幡前  
シテ 侍烏帽子 素袍 少刀 扇持  
男 シテ同断 又長上下ニテモ  
アト 長上下 如常  
冠者 狂言上下 如常

作り物 弓矢

- 7、鶏 舞  
四人共出立 八幡前同断  
入用物 剣先 二ヶ
- 8、庖丁舞  
シテ 侍烏帽子下ニ白のしめ但し緋  
ニテモ下袴上に着付キナカシ 腰帶  
小刀扇持長袴マキテ後の腰に付ける  
シウト 侍烏帽子 白のしめ 下袴  
上ニ着付素袍少刀扇持  
アト 女出立如常 教人長上下

- 9、音曲舞  
四人とも出立 八幡前 同断  
10、懐中舞 四拍子入  
四人共 八幡前 同断  
作り物 弓 入用物蓋
- 11、引敷舞 四拍子入  
シテ侍烏帽子 のしめ着流し掛素袍  
前下ノ腰帶ニハサム 少刀 扇持  
腰帶は着付ニカケル  
アト三人共出立八幡前 同断ナリ  
入用物 虎力熊狸狐ノ類 引敷皮  
ボウシ布 葛桶蓋

- 12、岡太夫  
シテ 侍烏帽子 素袍のしめ少刀扇  
アト 二人トモ八幡前 同断  
入用物 木地三宝ニ葛桶蓋ヲノセル  
盃 葛桶蓋
- 13、折紙舞  
四人共 岡太夫同断  
入用物 葛桶蓋 卷奉書

- お披露  
助川 竜夫氏 望月太鼓披 鬼頭社中  
佐藤卯三郎氏 狂言金網披 共同社  
田島英太郎氏 能菊 小鼓披 後藤社中  
関谷 正一氏 唯 小鼓披 後藤社中

- 10、懐中舞 四拍子入  
四人共 八幡前 同断  
作り物 弓 入用物蓋
- 11、引敷舞 四拍子入  
シテ侍烏帽子 のしめ着流し掛素袍  
前下ノ腰帶ニハサム 少刀 扇持  
腰帶は着付ニカケル  
アト三人共出立八幡前 同断ナリ  
入用物 虎力熊狸狐ノ類 引敷皮  
ボウシ布 葛桶蓋
- 12、岡太夫  
シテ 侍烏帽子 素袍のしめ少刀扇  
アト 二人トモ八幡前 同断  
入用物 木地三宝ニ葛桶蓋ヲノセル  
盃 葛桶蓋
- 13、折紙舞  
四人共 岡太夫同断  
入用物 葛桶蓋 卷奉書

何と云つても  
お茶は升半

創業天保十一年  
升半茶店  
石巻市本町一丁目